紀伊國名所圖會

三編　六之巻

高野山

JL 4
325
17

ル 4
325
17

紀伊國名所圖會三編卷之六 高野山之部下目錄

小田原谷
坊舍百十八箇院
轆轤峠
往生院谷
坊舍五十七箇院
蓮華谷
坊舍六十二箇院
五大尊堂
奥院
一の橋 鉦字ヶ芝 東谷 摩尼街道 曽我兄弟碑 犬の墓
法明上人碑
天神坂 天神祠 蓮生碑 敦盛碑 熊谷
阿字觀堂
別所圓通寺
大師堂
大六堂
彌勒堂
圓山辨財天祠
萱堂
青巖寺
阿彌陀堂
北日大師
千本槇

玉川　八影地蔵　行基井碑　佛供杉
愛宕権現社　数取地蔵尊
蛇柳　護摩石　立合藤
世南碑
門脇宰相旧跡　護摩炉　厳島明神祠　蔵尊院明神祠　天野明神祠
逢坂　吉野権現祠　弁慶力石　熊野権現祠　頬截地蔵
関院宮卵宝塔
雙輪塔　紙信忠信碑　法然上人碑
戸野内匠頭碑　織田信長公碑　太閤秀吉公碑
御供所　本阿彌七石塔
斷食所　護摩堂　卿室御庵室　静蓮法師庵室跡　一番石塔
桃園帝卵宝塔　閑院宮卵宝塔　参篭所　水向所　明遍杉
燈籠堂　持経上人碑　卿所之　應其上人碑　覚智墓　笠地蔵尊
丹生高野両大明神社　御廟橋　弥勒石　中御門帝卵宝塔　櫻町帝卵宝塔
万年草　三山
盲大師　岡加井　看経所　親鸞上人碑
骨堂　一切経藏
靈鳥　求聞持堂　霊元帝卵宝塔
御廟　佛法僧鳥
多田満仲公碑　腰掛石
江戸矢火燔之碑
流汗地蔵　茶井　住吉祠　八幡祠　天照大神祠　春日祠
朝鮮役士碑　天の川　弁天祠
盥漱盤　康基大碑　声明地蔵尊
六孫王經基碑
姑射山
石清水　清水観音
塊亭碑
明智碑
中の橋　指懸櫻　熱田祠
二番石塔　足引地蔵
芭蕉墓

紀三編六ノ目

小田原谷

長明発集

本中院谷及南谷の東よつづきそ往還の左右よ亘る巨東別所とよく壇上の東二丁許ふ當まう城州小田原教快上人の住せ地なりとよく号くらふ

小田原とよく寺ふ教快とよく人ありくる後ふ高野ふ住るゞ

新〳〵さ水瓶の様なども思ふ様うを儲けく殊ふ執ドやひくを様ふ打捨〳〵無院へ参みり彼所そ念誦そ一心ふ信仰〳〵くさまの水瓶をおりひ出〳〵そうぶ並べくう物を人や取もく不審うく心一向ふも非ざりきと。なまぐさの石ざみの上ふ並べくく覚えく返〳〵やおそうろうぐ捨〳〵くり

教快上人の弥勒堂の条下お委〳〵

雲石堂寂本

十八景

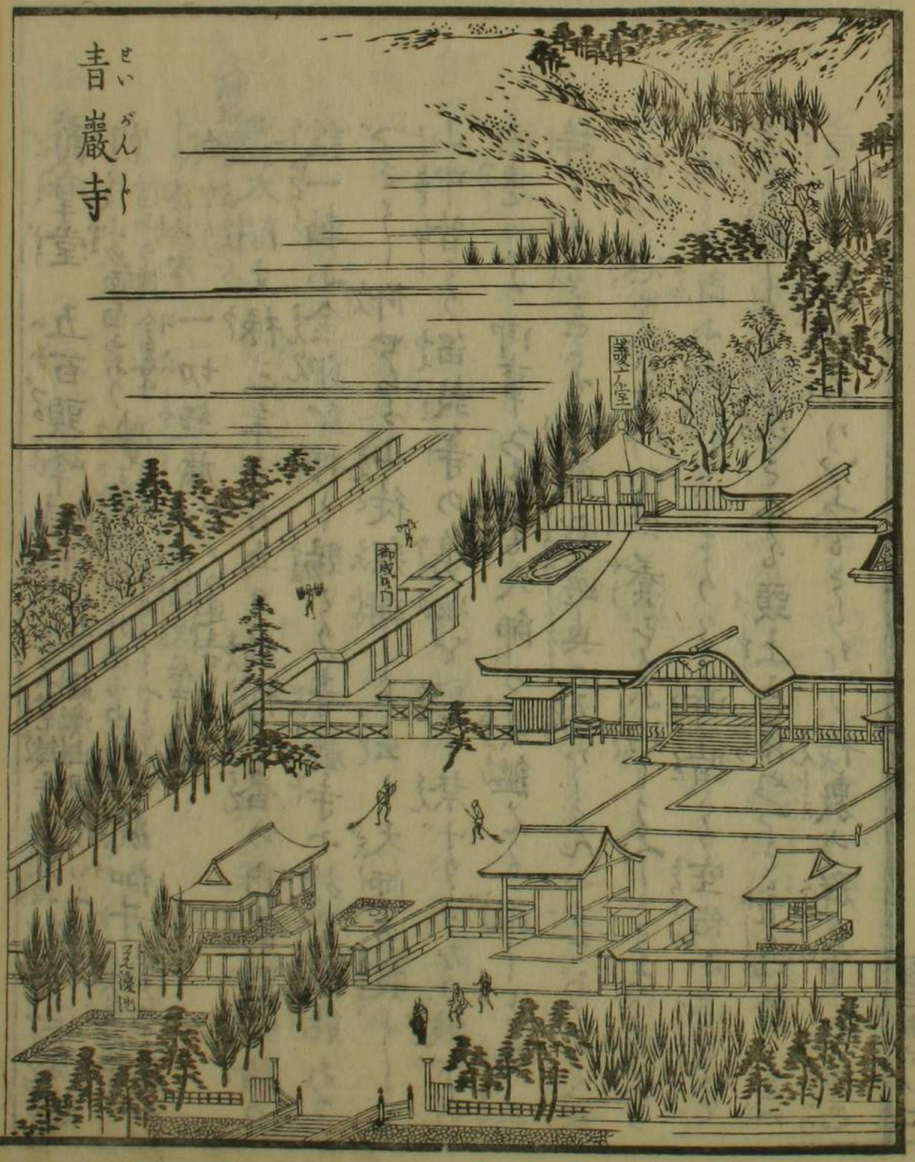
満山並甍

龍卧虎蹲東水長二千余寺　接門牆磬鐘不絶　暗香遠八百歳華一佛場

尤側

○青巌寺　本尊　東照神君尊像

靑巖寺（せいがんじ）



護摩堂　五百頭峰持修行の日五百羅漢出現をといふ後僧正真然後の山をひらく覚鑁上人求聞持朝後山の南面ふもとにあり覚鑁池門の外面にあり上人常に清冷潔白なり

一切経蔵　浪花津栄屋と云人の建立せしを

久禄雑記　豊太閤文禄三年三月五日新作十番の内高野参詣の謡一軸小金印を押して賜ふ青巌寺ふもとに卸能あり

ござる〳〵仰ぎ奉る山徒拝謝〳〵云〳〵大師の授〳〵て山中昔より宵鼓等の鳴物を堅く禁ずるなり殿下の御恵いかゞ御事ぞと再三辞〳〵申ゐまゐる太閤我遊興の為なるんかゝるめでたき大衆の労を慰めんが大師を供養をふ拘〳〵さまべ憚べうらずとて既ふ御能ござまりける時晴るる空俄ふ曇りて雷電影〳〵鳴裏を今も頭上ふ落めつるごとき気色ありけべ当後の諸大名いづもそなりける桟敷の群集〳〵皆色

を失ふ騒ぎあるごとく太閤も千手院谷の山道を覃騎そ兵庫まで遂をりけまふ此度一向寺法興隆の志ありまゝ禁制ふうとゝ是ぞの〳〵をゞなるゝ許さるべきとゝ御ふ案ふ相違〳〵少〳〵の謂もあ〳〵かゝき目をゝんせ〳〵まけまふて殊勝なる在世の徳行ありひかまつ迹すゝ〳〵とそゝき来なるゝぞ仰ぐ云云

○自證院
○真如院
○高室院
○極楽院
報恩院蔵譲摩金銘
明徳四年癸酉十月日権律師仙尊行年六十歳
当山院々譲摩壇を構へ修法怠る事なし故ふ古く傳へる譲摩釜偶當院に此銘ありとぞ
○胎蔵院
○高福院
○亮王院
　檀契北條家
○中生院
○高徳院
○遍照院
○報恩院
○東光院
○覚證院
○圓蔵院
　檀契松平雲州侯
○和光院
○寿福院
○観智院
○林性院

右側、

○東善院　檀契　有栖川宮
○總眼院　檀契　松平周防矣
○圓增院　檀契　松平山城矣
○蓮花院　檀契　松平丹波矣
○密嚴院　檀契　松平伊賀矣
○福壽院　檀契　本多矣
○愛染院　檀契　稲垣信濃矣
○玉藏院　檀契　松平紀伊矣
○淨眞院　檀契　松平紀伊矣
○阿弥陀院　檀契　稲垣若狹矣
○花折院　檀契　大久保佐渡矣

○帝釋院　檀契　松平紀伊矣
○眞城院　檀契　松平紀伊矣
○地福院　檀契　松平紀伊矣
○大善院　檀契　松平紀伊矣
○威光院　檀契　松平紀伊矣
○普賢院　檀契　松平紀伊矣
○愛染院　檀契　松平紀伊矣
○修覺院　檀契　松平紀伊矣
○蓮德院　檀契　松平紀伊矣
○本乘院　檀契　松平紀伊矣
○無福院　檀契　松平紀伊矣
○金藏院　檀契　松平紀伊矣
○萬生院　檀契　松平紀伊矣
○中性院　檀契　奥平大膳矣
○光壽院　檀契　松平下總矣
○最善院　檀契　松平下總矣
○花嚴院　檀契　松平下總矣
○淨雲院　檀契　松平下總矣
○天王院　檀契　松平下總矣
○林德院　檀契　松平下總矣

佐〻木高綱画像

泰雲院所藏

廣隆縮寫

紀三編六

或書云京極黄門の曽孫大納言為世卿出家して明釈上人と
ゆゑを密門ふ帰依〻〻嘉暦四年ふ登嶺あり花折
院へ入〻〻誦経の外他事なくおはしまし〻〻或時攅の花
を折て佛前ふ手向と〻〻
維ぎ〻めよ折とふさ〻〻た二色の御ものゆゑ我
句中ふ為世花折の四字を隠せ〻〻後中納言為綱卿は
歌を感じ〻〻ましゐ〻〻

折〻花よそ〻〻ふ為のいろまでも世々ふ栄名よ〻〻

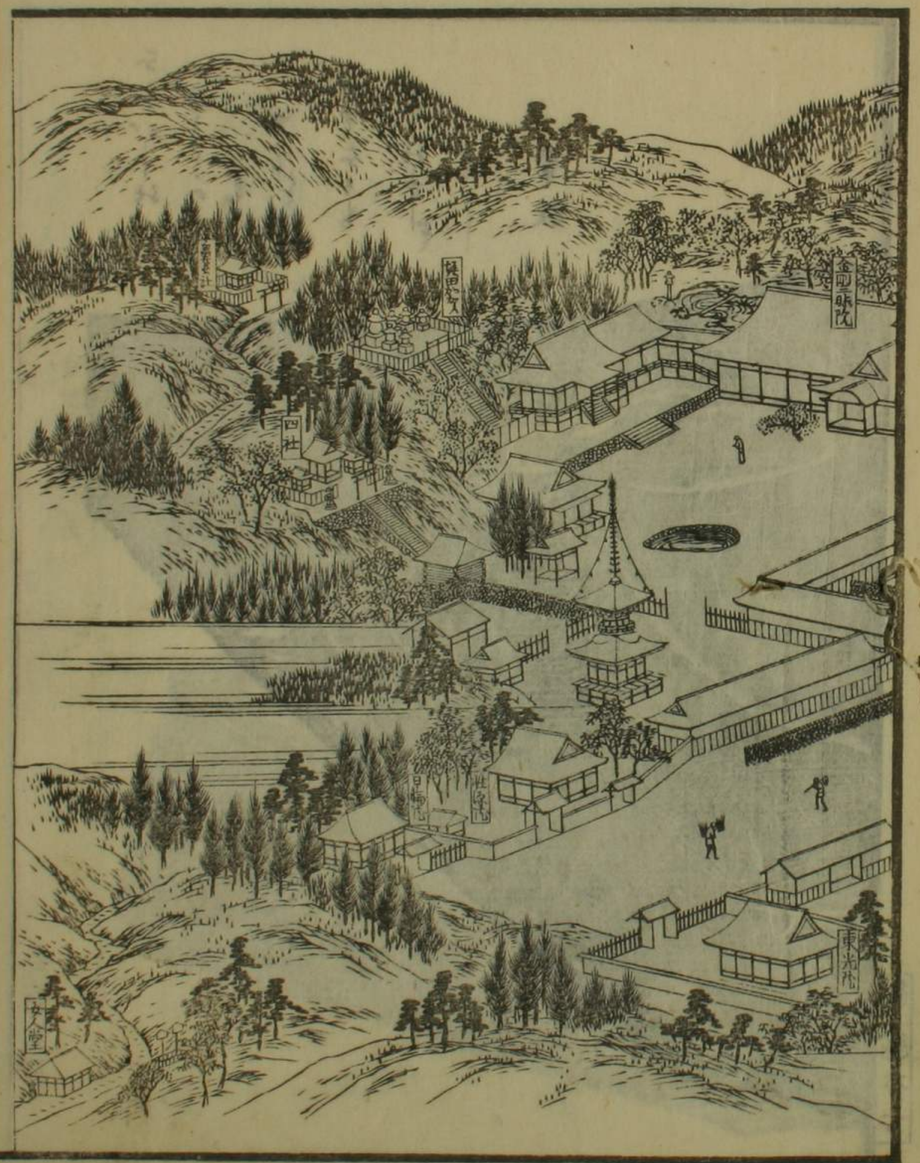
と詠じ〻〻ものぬ〻〻

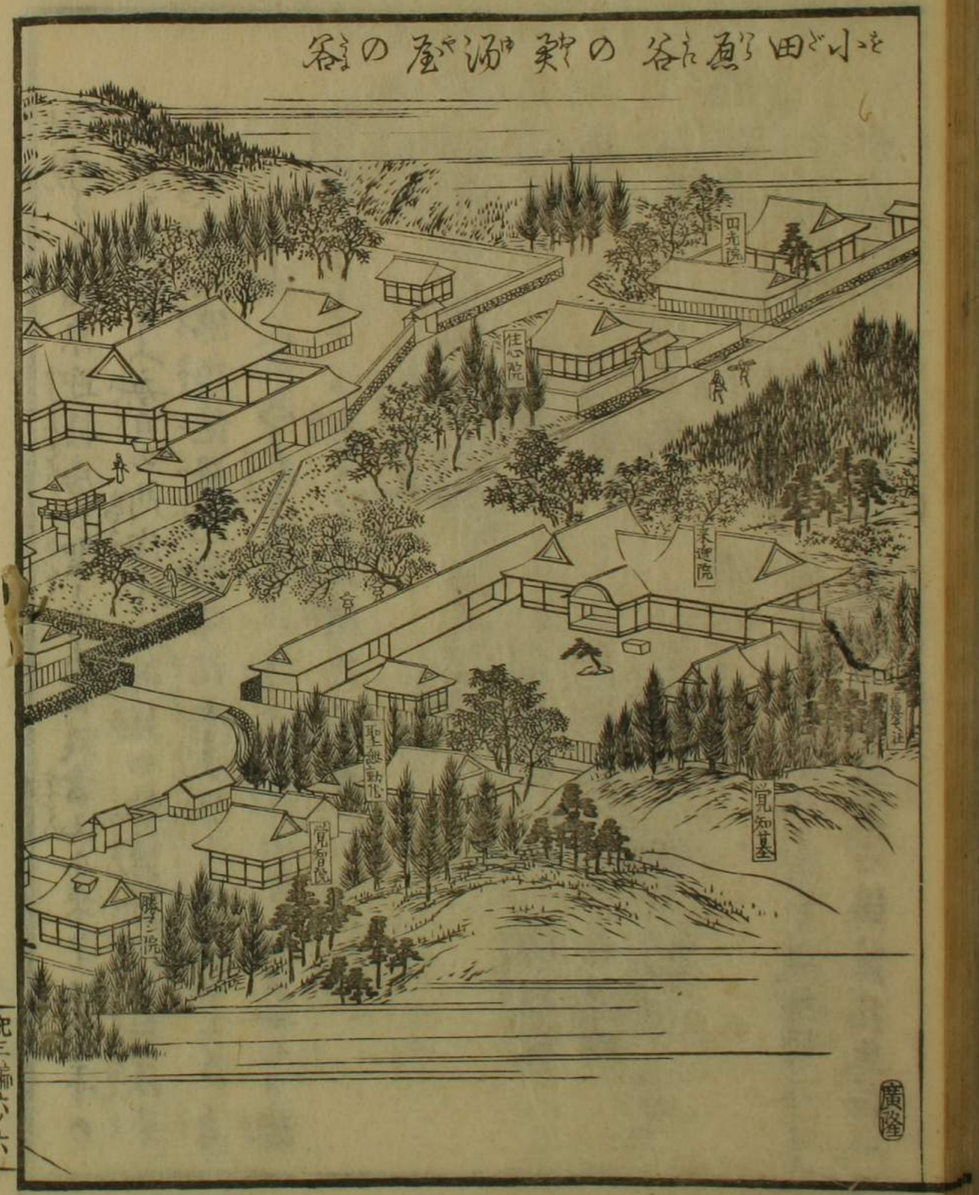
○養学院　○宝善院　○真珠院　○南城院
○釋迦院　○妙法院　○清浄院　○宝珠院
○安楽院　○泰雲院　○檀契　松平越中侯　戸田泷路侯　戸田采女侯
京極周防侯　京極加賀侯　米津伊勢侯

○法雲院　○龍泉院
○清涼院　擅契 井伊家
○安養院　擅契 毛利家
長禄寛正記
高倉殿御不例の事あり是ふよりさき御行念のため宮々社々
小御立願あり又貴僧高僧を仰ぎ大法祕法を修せらる
々々遂に御他界あらべき日野殿の御沙汰として高野山安
養院を仰ぎ御骨を奥院に納めやまさる 摘要
○光明院　○宝城院
□彌勒堂 一に淨土院とも 本尊弥勒菩薩　○常喜院　○和合院
此堂は教快上人の草創なり上人曾て淨土の青蓮花を感
得せる故に淨土院の號あり終に轉じて谷の名となるところ教
快上人の京師の人なり幼時出家して南都奥福寺に住む
壯年寺をさりて山城國久世郡小田原にうつりまし故に

俗呼んで小田原迎接房の聖という其後當山に來りて九余年の
春秋を送りしが毎日の所作として両曳の修錬弥陀の行法并
に受持大佛頂陀羅尼阿弥陀大真言を念誦せらる自
余が行法人の為に怠まあらず終に寛治七年五月廿七日徳
行積つて九十三齢にして入滅ありとぞ

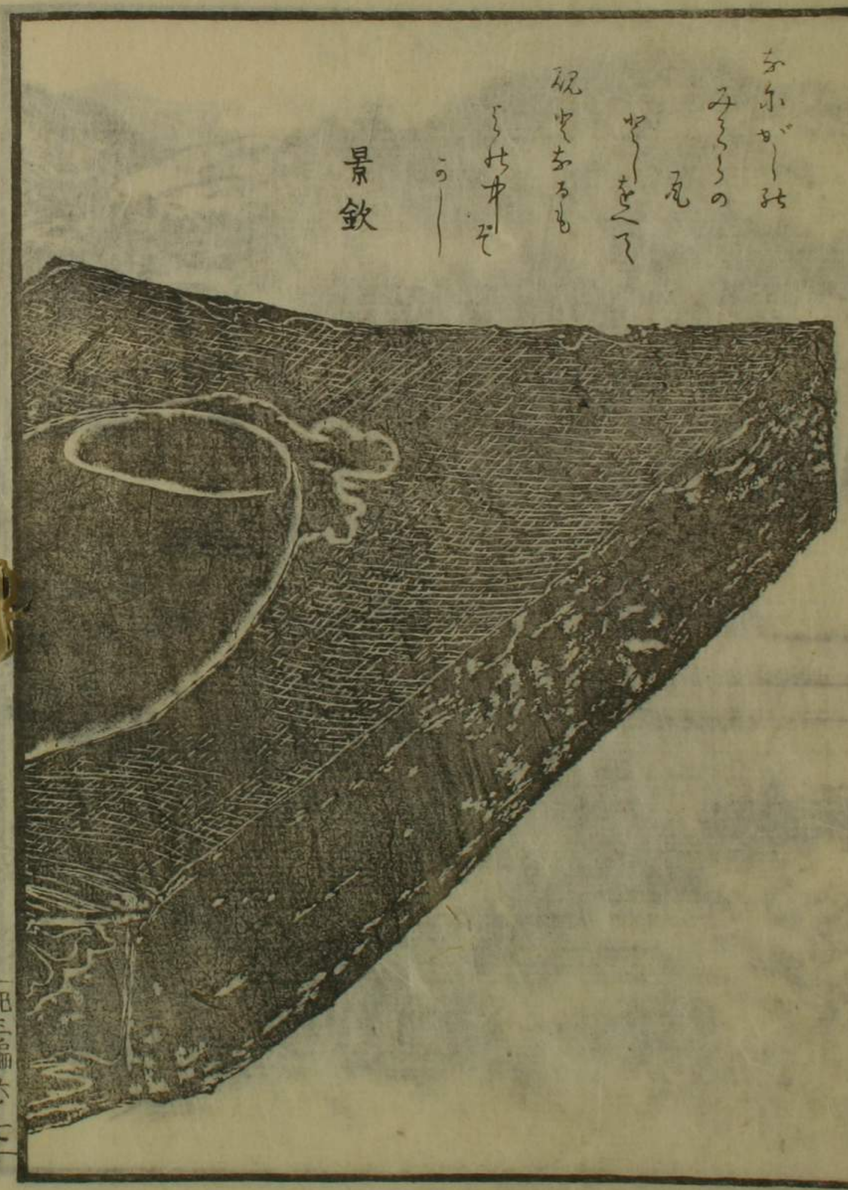
○圓城院　○善昌院
□圓山辯才天祠 大師勸請の木像の天女及十五童子を安す
○高聞院　○理徳院　○蓮蔵院
○長壽院　○萬福院　○林蔵院
○正雲院　○光聚院　○金地院
○圓蔵院　○西明院　○西蓮院
○上蔵院 春川詩草 中遊上蔵院
檀契 久留島家
檀契 松浦家 大村家 五島家
檀契
僧竹林深出磬聲來翠烟景雨中清無邊春滿梅檀海不
住雲添兎率城風拂畫簷松子落泉送石榻蘚花生詩成


金剛峯寺
四社
住心院
東光院


小田原谷の数珠屋の谷
四光院
住心院
本地院
遍照金剛
真如堂
勝三郎院
廣隆

唐青龍寺瓦硯
其質鍊めおとし
金剛三昧院藏

廣隆縮寫



景欽

紹三編六ノ七

遊客依欄処時聽黄鶯喚晩晴

○圓滿院　○妙夢院　伊豫國南
○淨土院　○等持院
○修善院　○見正院
○金剛三昧院　○正受院

ふるさとのもみぢもうまつけまを
弘法大師御筆南無釈迦如来金剛
ようく彼岸とおもひて詣でゝ見れば
ふるく寺の扁額四天王寺とあるのみ
猶ひ勅額の額等ありて
云ふうつさふ山ぬなる門をたづねんこう

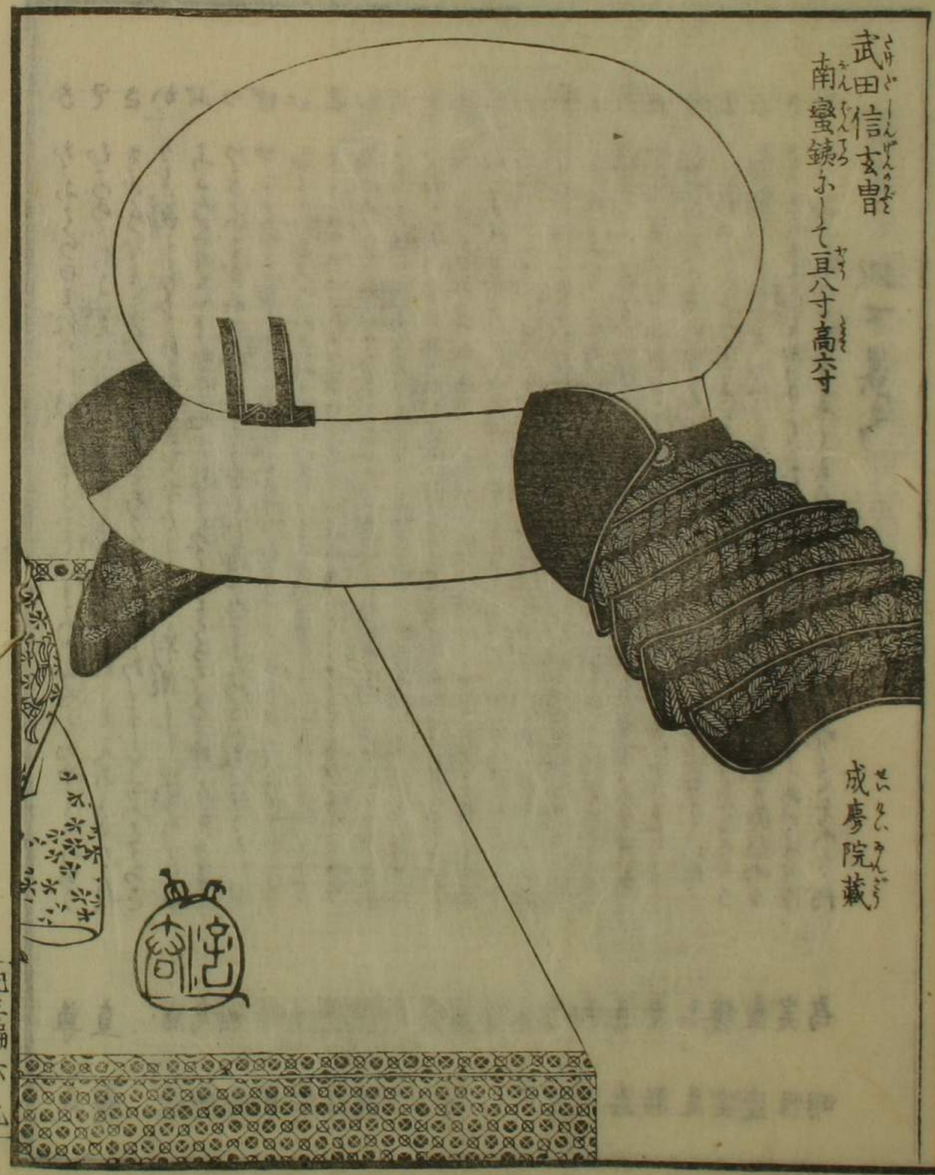
大納言為兼

放鵬子

直義朝臣奉納短冊寫　百二十枚の内
二十四枚の歌なり

おなふくらのこだいはいものうらくいまはものうくいまはものうくいまはものう

武田信玄影
南蛮鏡ふーて直八寸高六寸



成慶院藏

同肖像

武田道遥軒信綱の筆といふ當院の什宝なる事万宝全書ふも粗みそもあり印文ふ信春とあるを信綱の一名ふや

廣隆縮寫

跋文

夫宝積経要品者示供養如来之真理著空寂自性之本元寔是修行大乗之真路證得菩提之通門也是以新書一軸奉納高野山金剛三昧院以為常住持経矣是中伽葉會分初則余自書之其次夢窓國師書之優婆離會分則征夷大将軍書之抑先年因或人感霊夢以南無釋迦佛全身舎利之數字各冠和歌之首句以詠之既而成軸矣為令彼詠歌之衆結良縁寫真文於其紙背者也伏冀三十一字之綺語契當二嶺菩提二十餘輩之歌人成就二世願樂兼施餘薫普及二曳敬白

康永三年十月日　　従三位左衛督兼相摸守源朝臣直義

作者　二十六人　短冊百枚

○光明院御製六枚　○源尊氏公　十三枚　○源直義卿十二枚

○高階駿河守重茂　二枚　○多々羅合戦之時奉製二将軍弓矢和漢両朝之例人歟

○權中納言為明　七枚　二條家為世卿孫　○陸奥守顕氏　三枚　細川八郎四郎頼貞男

○少納言藤原有範　五枚　南家儒三位藤範男　○長井大膳太夫廣秀　五枚　大江高廣男

○高階武蔵守師直　一枚　法名道常　○行珍　五枚　俗名二階堂信濃守藤原行朝

○讃岐守頼春　三枚　細川八郎太郎公頼男　観應三年閏二月二十四日於七條川原討死

○權中納言為秀　五枚　法名祥最　為相卿男　○紀行春　五枚　法名尤馬權頭源泰直

○阿波守和氏　五枚　管領細川公頼男　○道恵　五枚　俗名津宮嘉吉元年赤松害之

○渋河丹波守貞頼　三枚　義春男直義舅男　○尓忌　五枚　此名不詳

○實性　五枚　実性寺法印也法印長舜男　○蓮智　三枚　俗名宇津宮遠江守貞泰

○兼好　五枚　治部少輔兼顕男　○頓阿　五枚　俗名秦撃法印仁誉男

○静辨　二枚　按察使法印光成男　○慶運　五枚　法印静弁男

○光政　一枚　秋山太郎源光定男　○高範　二枚　傳不詳

○季行　一枚　傳不詳

○栗飯原下總守清胤　一枚　栗飯原氏光一名欽

以上

轆轤峠

高野山より熊野へ（この往還七峠ありこの峠壇場の諸伽藍寺院ことごとく眼下にみゆ女人堂巡りをすればあのところへ出るなり）

三寸美

化そう
躑躅峠
をつゝあつち
くびさし
のべく
ほね
堪場

○日輪院　○東光院
○聖無動院　○來迎院　檀契　伊東戻
○善壽院　○醫王院
○法門院　○德城院
○西門院　檀契　紀府三浦本光
○成慶院　檀契　内藤山城戻　押沢伊豆戻　秋月戻　久世　松平甲非之戻　松平信濃戻
○最乘院　○仁王院　○昌蔵院
□轆轤峠　小田原谷の門湯屋谷の奥にあり
此處を大瀧口と云　熊野街道なり
小田原谷のあまつづきて生圖の左右に寺あるまゝ此處を往生院谷と呼ぶ

往生院谷　左側

○吉祥院　○林泉院
○西光院　○威福院
○勝鬘院　○覺智院
○宝蔵院　○勢観院
○安樂院　○常住院
○教學院　○威乘院
○智身院　○相應院
○安住院　○正仙院

○成願院　○正福院
○成福院　檀契　毛利甲斐戻　宗　對馬戻　毛利讃岐戻
□阿彌陀堂　草創不詳　檀上を去る東十丁余
○藥師院　○醫王院
○李願院　檀契　千葉戻　竜造寺戻　鍋島戻
○三宝院　檀契　二本松戻　松平河内戻　溝口伯耆戻
○東藏院　○榮泉院　中山志摩戻
○善明院　○龍城院　○高城院
○遍照光院　檀契　南部大膳戻　南部丹波戻　小笠原大膳戻　小笠原備後戻
○鍛池院　○地藏院　檀契　分部大溝戻

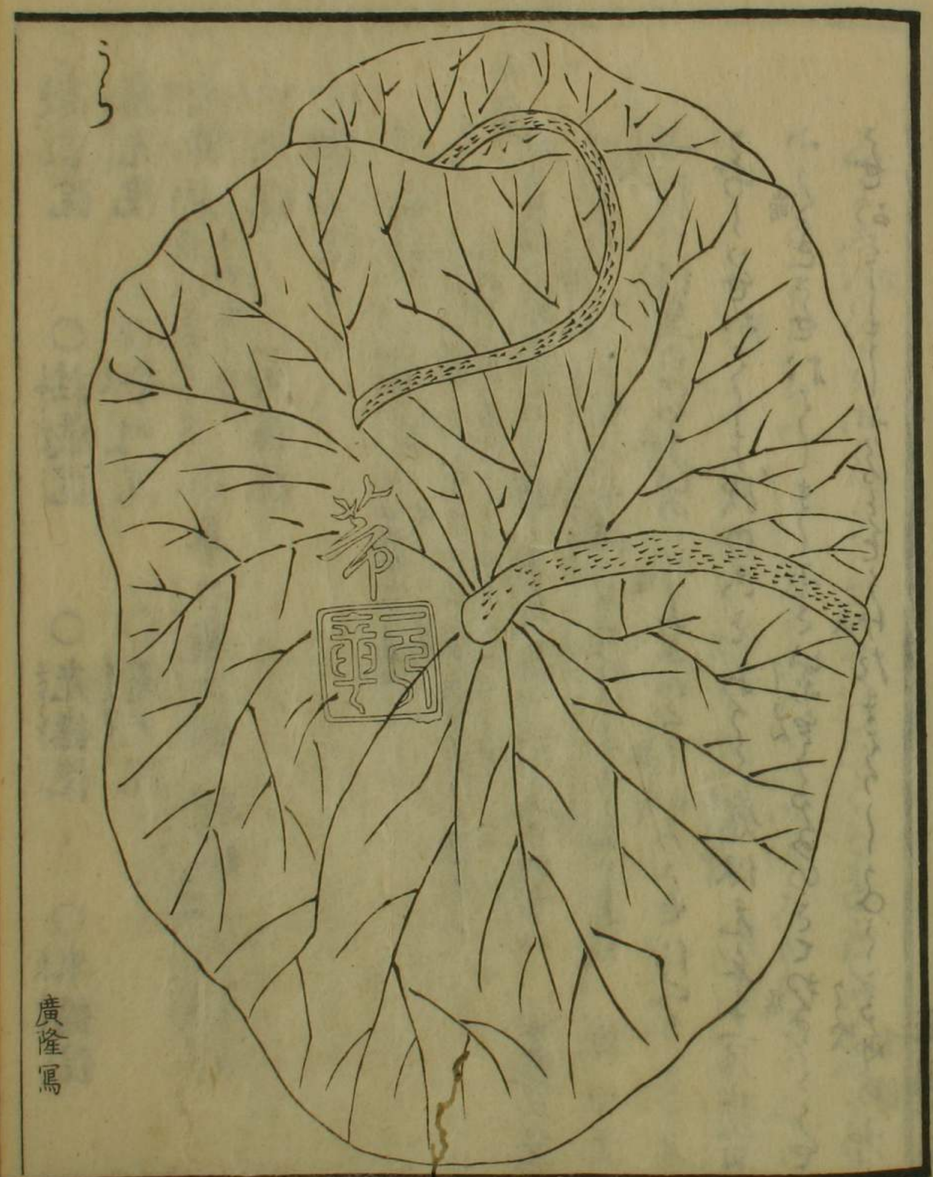
右側

○慈眼院　○蓮花寺　京極壹岐戻　土屋相摸戻
○持明院　檀契　京極長門戻　甲州武田家　江刕浅井戻

おもて

米元章荷葉硯　大さ圖のごとし

成福院藏



うら

廣隆寫

○真言院　○荘厳院　○光徳院　○来福院
○慈光院　○普門院　○蓮光院
□大師堂　壇上を去ること東十町余にあり　本尊日輪大師　入日輪観の像なり　草創つまびらかならず
○中照院　○不動院
○菩提心院
○美福門院御墓　菩提心院の東北一町ばかりにあり　美福門院かくれさせ給ひて後のちぢの御菩提のために　前大納言成通のうへられたるとぞ　皇太后宮泰子
続後撰　わすれ草おくにも思ひやらずや　皇太后宮大夫俊成
□　なきかげのこかくれおひし袖の露
続古今集物語　女院いまは皇のやまひのもとにて　源仲業
うづもせおくもよ秋のむしろふみぐし　落髪
ふくまさせなし　崩　応保元年十一月廿二日
こせおもふ　逝
○鰲樹院　○妙法院
○北室院　檀契　仙臺侯脱坂中務侯　伊達遠州侯　田村左京侯　九鬼長門侯
○心福院　○宝持院
○松雲院　○吉祥院
○阿叉院　○密蔵院

地藏院藏

大師行狀記中俗典讚仰の條

繪筆者不詳

詞近衛道嗣公書

廣隆模寫

備後守時通
美福門院の
御遺骨を
首ふけく
高野山へ
上〳〵〵
くろ〳〵く
債世迷物語
こゝくろ

○福壽院

□萱堂　壇上を去ること東十五町許ふかし

本堂　本尊觀世音　西天竺より結集　宝塔　鈿扉　御影堂　大師の御像　大日如來　親王筆

蓮池　靈池へ觀音の閼伽井　四所明神社　樓門を入　梵鐘　總門　麒麟　鳳龜　龍ハ　○近傍殿墓所　境内にあり

新古今物語　左衛門の尉作

くらかもと覺心よく念佛者あり　紀伊國由良の湊の漁者なり　ふかく發心して　法灯國師ふもとに寢食をともにつくりて　庵を　むすぶ

引導地藏　大師の御作なり

おのづからんのすむら死れをいたむ堂のおもての月

○上池院　○如來藏院

○福生院　○壽量院

○延命寺

○引導地藏　大師の御作なり

大師未世の衆生を淨土へ引導せんとの方便なりとぞ

嵩山の繩素葬棺を此堂前にとどめ　後葬ある引導

地藏と縁を又大師入定を怨しこと顧て眸を京へ轉し給ふ

とぞ　又此尊の圓光ハ大師宝珠を盛

ともゆきつぶえんくらく

おのづからんもものどもまず堂のおもての月

ともゆきつぶえんくらく

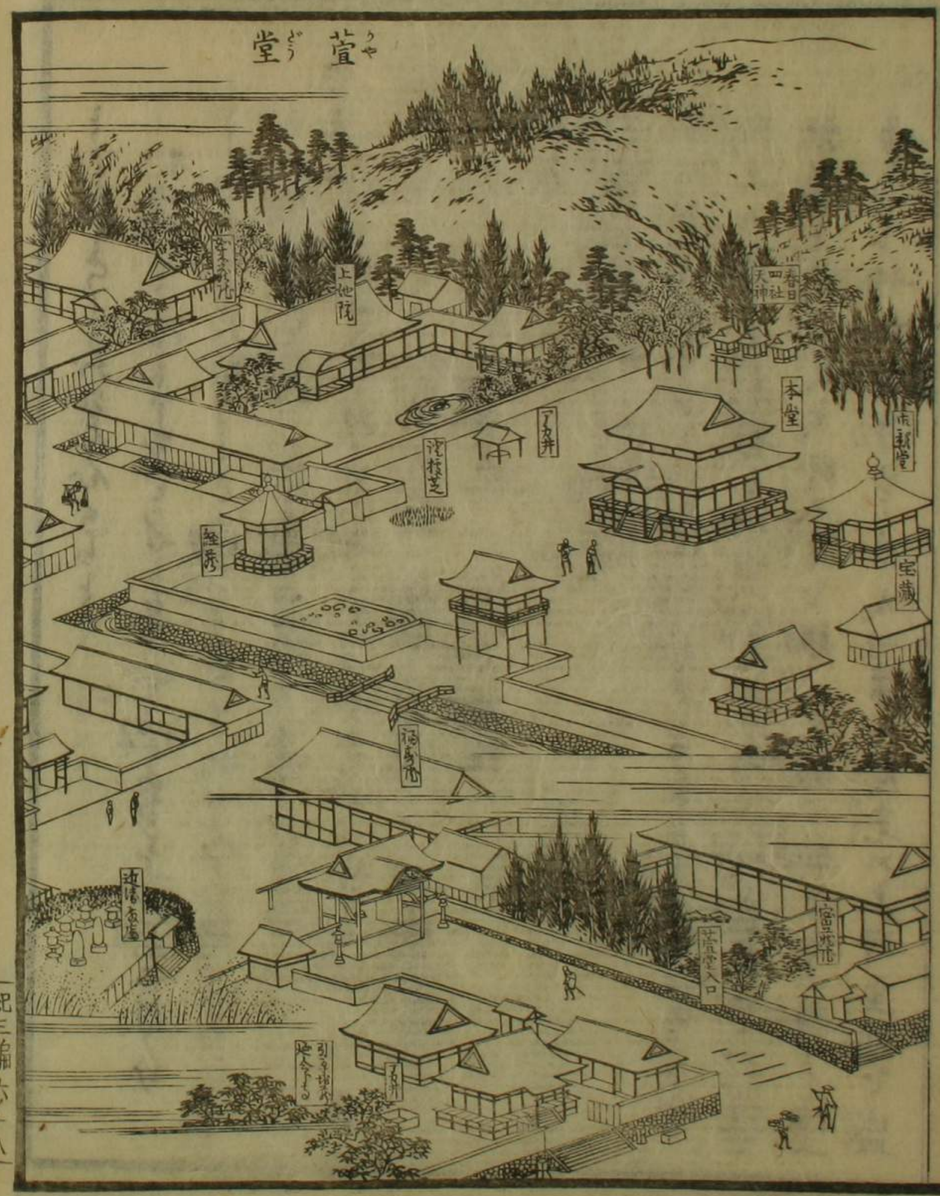
庵のあるじをいたむ堂の奉

詠百首狂哥　苅萱

○入安　○密嚴院

○千藏院　檀契　有馬侯

萱堂
新潟らも
月もむろよ
似さうろう
日向
寺流
廣隆


萱堂
上地院
本堂
宝蔵
紀三編 六十八

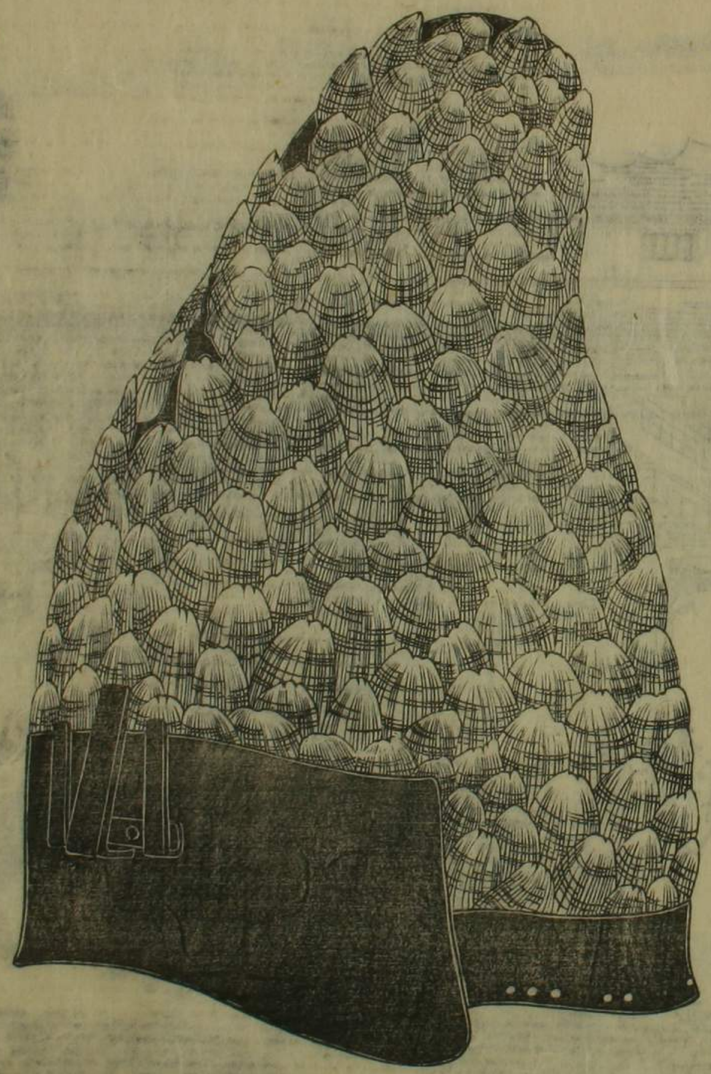
赤松圓心木像

赤松院所藏

廣隆縮寫

貝冑　圓心着用ト云フ

同院藏



廣隆縮寫

えげなうくはんばる
蓮華谷六軒店
珠數屋

所の圓盆なり縁起ふ妻〳〵
往生院谷の東より續きて往昔の左右より亘りて壇上の東八丁許りを周る明遍上人法ふ自在をわく此地を変じて浄土とせらるゝ忽宝蓮花を生ず故ふ蓮華谷の名起る
頼豪記
明遍上人住ニ定中一其夜所ノ観蓮華漸々ニ相舒テ光明赫如開テ眼見ニ大蓮華中一有ニ無盡荘厳一上人心魂廓然感動暫有而後蓮華漸斂復本従其得初位三昧ヲ上人姓ハ藤原少納言信西の一季子なり幼〳〵より志ち〳〵難渋一光明山ふ住しんを二綸の密教を聴聞の後突然発菩提心法相維摩会の講師と勅請〳〵其声天ちまるし十七にて少僧都ふ擢んでらるゝ遂ふ多聞ふ通ずるを以て名を世ふ弘伝の時人称して一院とす一時浄土宗の祖師法然上人も成〳〵西方の要義を問答を大師感ぜられ〳〵影現して浄土の要文をさづけ藕糸の佛伽梨と〳〵ふ袈裟を授け給ふ〳〵其旨を編次すべきよし仰ありしかば〳〵一品ふ経を行道すべきよし仰ありしかば〳〵一品ふ経を行道すべきよし仰ありしかば〳〵一品ふ経を行道

○中性院　○浄心院　○松壽院

□阿字観堂　檀上ヲ去ル事十九丁ニアリ　本尊阿弥陀如来

○清徳院　○微雲院

○大圓院　檀契　生花家

右側

○萬蔵院　○法眼院

○明王院　檀契　森川内膳家　松平和泉侯

○龍生院　檀契　石川日向侯　堀尾家

権護山房　鎮一一泉ノ神竜蟠踞定多年兼知芳契慈尊暁後會期遥九一五ノ天　釋立詮

○蓮壽院　○阿吽院

○來藏院　○毘沙門院　○増福院

○恵光院　檀契　島津侯　松平隠岐侯

○刎泉院　○梅松院

○光明院　檀契　阿波侯　阿州稲田氏　紀府久野丈夫

○持宝院　○泉徳院　○佛心殿院

薄蔭紀行

持宝院ふまゝぐ紙谷運生法師の尊像をえるうの集古十種小軸らまこゝろもつも猶物ありけ院を智織院といひ〳〵比蓮生富居して紀ひをかへ〳〵ここの人紙谷寺と

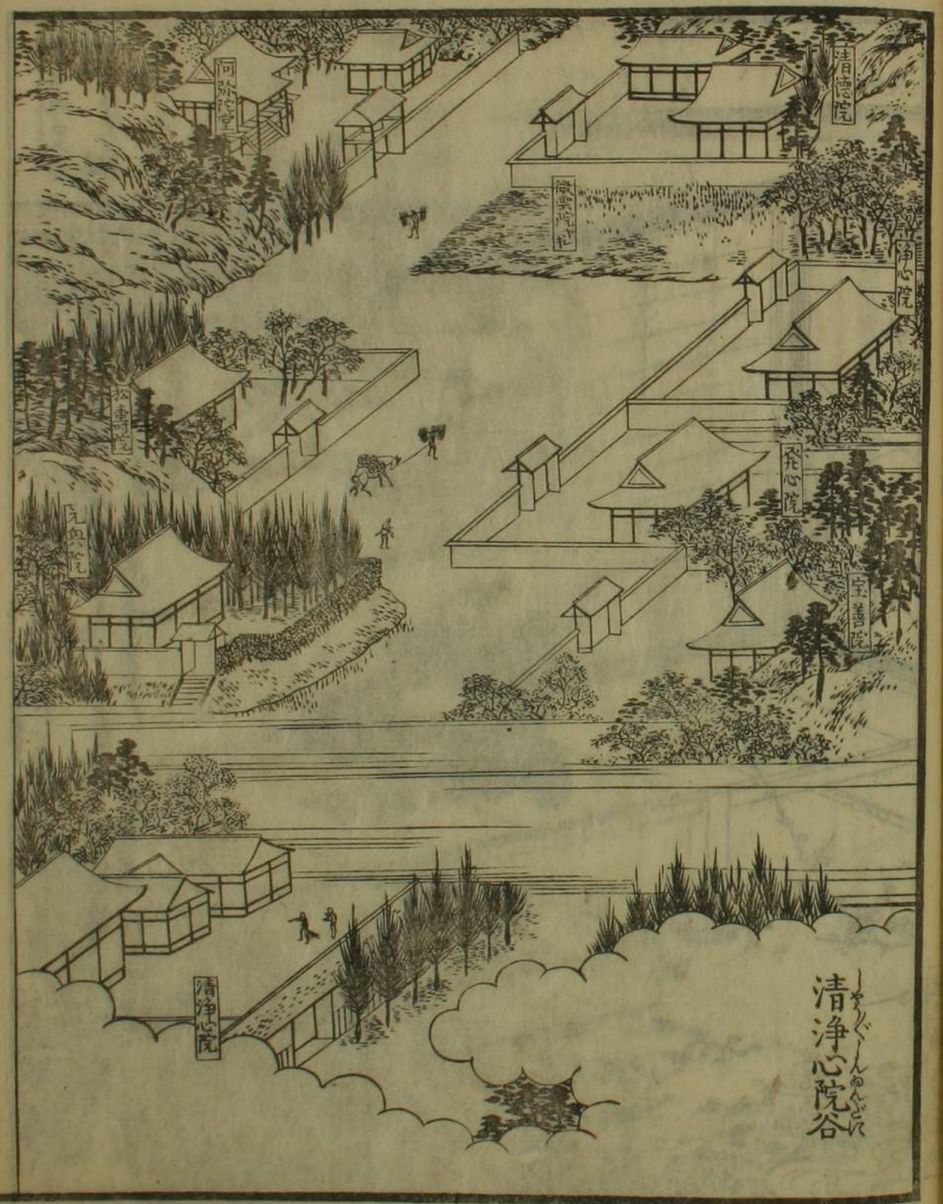
いふうかの注ありあるふるよ

紙衣のふ紙いやまぐ弥陀のこゝろひ

いふ〳〵への檀ふまゝる紙衣のいろおもとりひやう

道心のおりことなるごろ

○養壽院　楓月興



清浄心院谷

納ふるに天平年信者が持ち来れる紙名の数を挙げ其他無名の紙もあり
なお山内徹底ふ紙名ありて其数を知らず紙数は今ふ紙よりあらず白紙をつぎ
あるいは二月きの行基などの名もあり

○上珠院　檀契　牧野庆
○愛染王院　○十輪院
○持宝院
□丈六堂　檀上を去ること十七町余東　本尊丈六孫陀　坐像なり法眼舟心の製なり
仁平元年　鳥羽法皇の御願堂なりと云
□五大尊堂　丈六堂と並立す　本尊不動明王　大威徳　降三世
軍荼利　金剛夜叉
□千本槙　五大堂の堂下にあり　深林中にあり
此樹一根より千株も生ずる事一瓶より数本挟むが如し
鼻祖大師虚空蔵求聞持の法を修行して感応ありと云
と云ふ徳の所為なるべしその也

○常慶院　檀契　水野一族
○金性院　○五大院

赤石滝口入乃
山奥のち来
蔵院ふ住居
ヒ〳〵ろ雑司
横笛の亡魂入
を暮ひ鶯と
化〳〵此寺ろ
来て愁腸を
轉て
内の井
中にお
ちく
死ぢり
因く
世人

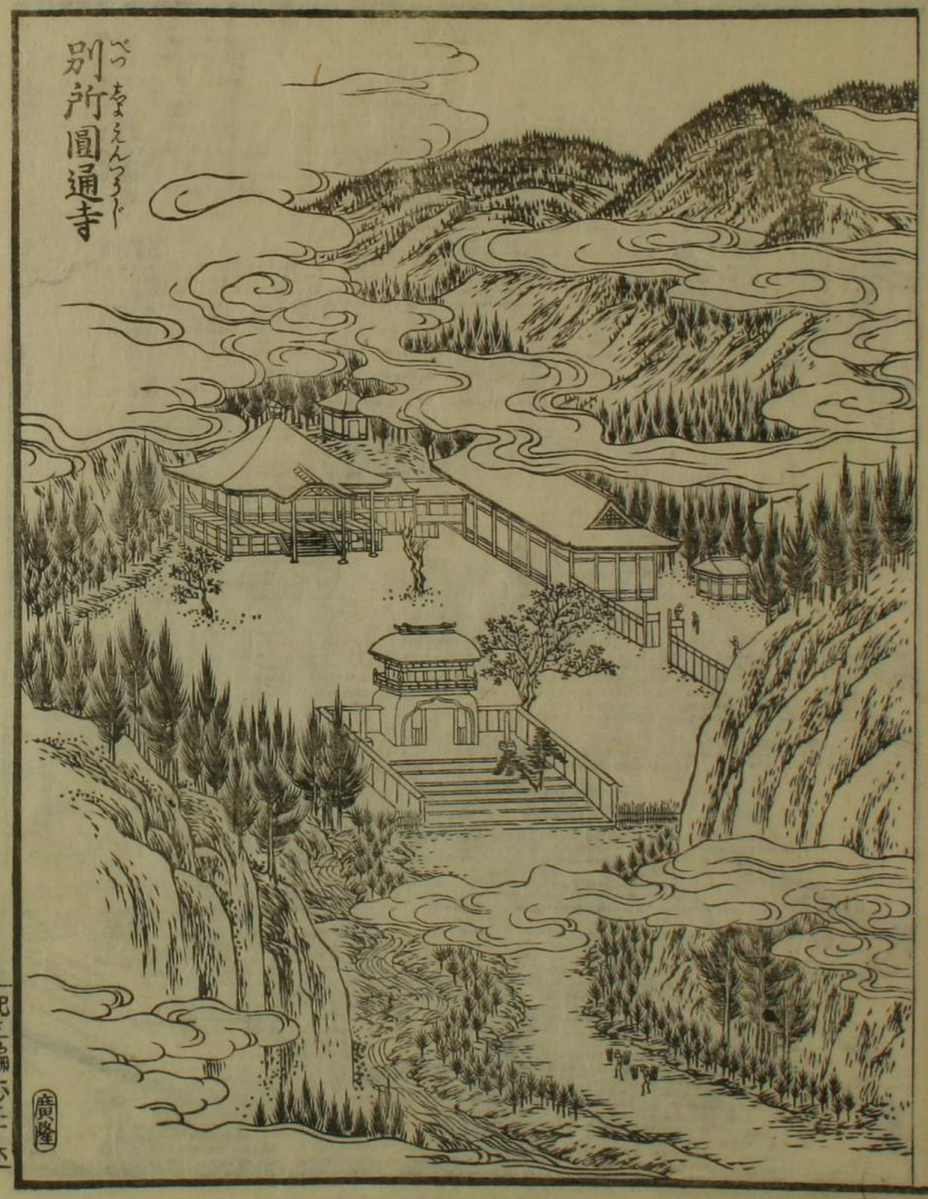
其井
を営
の井と
いひ
其辺
の梅
を
鶯
梅
と
そ
とうや

ありまでかくれどく繁茂せらつて山中ながく樹を
石をうづみ松栗亦無しかゝる幽境のさまを一枝玉ふ
みづの一目ありのさまうつし出でそゝやかなり

○本王院
春川詩草
千樹桃花照扁舟人先佳節醉香捜林間飲澗過玄鹿塔
上喚晴帰錦鳩拾籟更和仙唄落鐘聲時出白雲流明朝
縦赴蘭亭會高興爭如蓮社遊

○誓願院
續今昔物語
今ハむかし京に條ざうの帝と申す御時に一人の男ありけり
ざうやあつて妻のすがたうつくしくせんかたなかりけり
我をもんのごとくさせてまもりけるほどにいつしか男もろともに
ありけんしそざやのごとくなりて年月をへけるまゝに女の
十女をのこ子どもをさへまうけつゝ人目みつゝべくもあらざりけれども
その女ども男をすてゝ血のつながりたるをもつて
おくりそへなどするもいとやさしくぞ見えける
ふりそへなどするもいとやさしくぞ見えける
うまでなりけりとぞ

霊巌寺
無染



○萬福院
○蓮華三昧院
○明泉院　檀契　長州宍戸氏
○東根院
○戒定院
○理趣院
○岩本院

十八景
夜々月明幽砌中普賢鏡智踐高風一世移人易山猶奮喰

御中明月

雲石堂叙本

○智性院　檀契　森川内膳亮
○智門院　檀契　稲葉氏
○延命院　三浦備後守
○梅林院
○常住光院　森川下総守
○瑞雲院　淡州和田氏
○見樹院
○雲聖院
○尊勝院
○丹生院

そもそもよのがくがくあるもふしぎくさくさそれぞれ
せんぐわんふかきもものつよるべくさくさうそれぞれ
名のある月より女のまゆもあるものの日を迎なくおんもろもろひとをそとをとらへつまるまろう
ぐうぐうもろいなふ月もいふあるまなさもあつぞ覗もらう
仏陀をとつてめくれ女の後世をとうえあげてあくれとこしめくまで
くんこ来るふかるまうをきこえ
ろわお会ーまん人陀院や裏をなるまうとうつまで
ろうとなう

□別所圓通寺（往生院谷の南八千許深林中ふあり）本尊釋迦如來
虛空藏菩薩二尊ともふ深慶師（亜島山律藏院とふ寺記ふつゝなり）地藏尊（せふ火燒の地藏尊と
昔智泉大德（終身所帰のそ像之）
凝〳〵一島鳴ど清溪珠を吐く流雲幕を垂る空侶禪客
の宜〳〵接遲ナざることろ幽地中の幽地とつべ〳〵大德奄化
のち漸荒蕪せふ中頃俊衆坊重源師あり東盛ん
所謂重源逐電〳〵高野ふありとふ山処なりべ〳〵長明が
発心集〳〵齋所推助成清が子親〳〵かくともいそぞ遁世
〳〵〳〵と重源上人ありがく〳〵るさ〳〵る野よ
新別所とふ呼あり我往る処うふ不斷念佛を営〳〵一
邊ふ往生極楽を祈〳〵外他の営なし早く彼衆ふ
逢と念佛の功つもとふ〳〵野へあり〳〵〳〵

後山口重政とふ者あり少ふ
髮〳〵深慶とふ本院の荒廢せるを歎〳〵大ふ悲願を発〳〵
堂宇こゝ〳〵維新〳〵　神君の嚴像おゝび
歷代の尊牌を安置〳〵冥福を祈誓〳〵そまつる旦
中藏院主良永俊賢師を請〳〵中興とす俊師て
〳〵〳〵律家の法幢を建〳〵淵博なるそち密門
師まて事教を達す曾〳〵勲功福王寺主法忍師
〳〵〳〵開祖表制の結集二學の二緑ふ〳〵〳〵
專有部律を興起〳〵ふ〳〵〳〵言宗の僧のこ持する亦の
律と定む余未本院及び福王寺とふ〳〵有部律
一家の本山〳〵称をそ德行まつべ〳〵
右院々年中の勤行いとまさ中ふ光明真言土砂加持とふものあり
抑不空羂索経ふ説ふ呼の大灌頂光明真言ふ大毘盧遮那如來

と無量壽如來との両軀の如來ぜ心中の神咒なり一遍誦すべし百億無量の法門を誦し畢るよりも最勝なり光明真言經ふ説ける光明持念の行者い命終の時ふ臨そて彌陀如來自荷負して極楽へ引導したまふ又死者の為ふこの真言一遍を誦せば必ず無量壽如來死者の為ふ手を授けて極楽淨土へ引導したまふ猶十遍百遍あらい千遍万遍ふもそくを功徳の大なるを諸經王ふえらう道場禪師安楽集ふ此真言を以て土砂を加持すれば一百八遍して屍陀林の中ふて亡者の死骸の上ふ散じ或い墓の上塔の上ふ散じ隅ごとふ皆是を散ずれば土砂ふ触る光明の全躰なれば照觸する所の利益難思にして功徳実ふ空しからず是ふ依て累代先師の追福の更なり信心の道俗男女十方の檀越過去の霊魂追資の為ふ土砂加持の法莚を営んを願ふ時い道場を厳飾り七五人の衆僧を請じて一日六座勤行をなすを光明真言土砂加持と云

蓮華谷の東深林をたづぬ
往び終ル日影を窺ふ只清泉瀧々天風聴々として幽邃寂寞塵寰を隔つる弥遐〳〵
續後撰
春をまつ谷の氷もとけそめて岩もる水ぞ山を出ぬる　入道前関白太政大臣
續門葉
わけ侵つる奥の山路の雪の下に　法印覚基
おくの谷〳〵もるもいつ〳〵
雪玉集
ぬるそめや天津日影の
ちる〳〵ちり〳〵
垂の〳〵ぬ　杜國
花をうゑ　雪中菴
○一の橋　野坡
橋より御廟まで道の左右ふ公家武家をそゞめく浮屠氏
も更なり海内の諸名家農商の男女カ士俳伶のまでを
碑碣纍〳〵幾千万とふ數をしらず各院〳〵を守護
〳〵香華を拜し菩提を弔ふ台〳〵就中一番石塔の

如き高大眼を驚すあり朝鮮役士の碑武夫を慷慨
せしむるあり本阿弥の七石塔親鸞上人の碑の如き制作の奇
なるあり他列候の徂先れ碑大なるあり衆碑と魁出して著く
小ふるい殿宇を造て五乘を裝ひ〳〵輪奐〳〵或ハ石廊を廻らして
〳〵或ハ石廊を廻らして花表を建
趣さまざまにいづれも皆高祖大師
共ふ三會の暁を期せしめ深き因縁ある事ならんを大畧ハ
惣圖に載せり今古碑名區且神祠佛堂の類ハこゝを方が一を
たゞし記次

性霊集高野結衆文

沙門遍照金剛敬白此道場者普以五類諸天及地水火
風空五大諸神並此朝開闢以來皇帝皇后等尊霊一切
天神地祇爲檀主伏乞一切冥霊晝夜擁護助果此願
惟哉大聖冥卒降神矣自髪毗中納言大江匡房毗直也人乘搓浮海越境
問津甘露弘法大日施仁抔示兆五筆留真二朝傾首

萬葉禮慶佗一鄉ノ月ノ夜高一野ノ花ノ春　初證三二一地一後遺二全一身一入二傘
剛一定二昇一摩尼一林二民受二其ノ賜一奈一何大鈞ヲ
一ノ楊ノ如ク卬ノ翁ノ如ク一ノ名モ志ノ如ノ

石塔の大名小名ありけり　光廣

○錢字が芝　太閤よりある又衆の頭の墓ともいふ

○東谷　奥院山入口南の方ふ一谷の門あり内ふ二十四の坊屋並ひ立て行基井の末庇三昧聖ノ墓所ありて戒行を守ること七戒を取て納め奥院山内にある所の公卿緒侯の石碑緒寺院山内の草鞋とりつゝもいかゞ所由ある事ノ如ク

○癩病庵　蓮華谷を去ること丁余にあり本尊阿弥陀如来大師の病ノ治ノ為ノ洪國の病ノ如ク悉ノ皆ノ悲願を捨ノ子苦の者ノ為ノ金病と現ふ今病根を断ち平愈せしめ給ふ大師加持力の法験もかゞるものなり有がたき方便なるかな爾のこゝろ血脈と子孫

○摩尼街道　東谷ノ通ず

○曽我兄弟碑二基　左側にあり鬼王の建ノ

○犬の墓　日上人慈二年の俗あり

紀三編六ノ三十

○法明上人碑　日上人ノ法昌闍梨ふ受戒一密教を学一ノ解を得ノ大徳ふて河内勝通大念佛宗の中興なり俗ノ傳記ふ

○天神坂　此ノ坂ノ天神の祠あるを以ノ名とす

○天神社　右側にあり天神ハ大師の化身ふまします祭ノとき

○熊谷蓮生碑　左側にあり背ふ貞和二年丹治忠直立之と彫ふ

名よびくそ

○平敦盛碑　蓮生の碑ノ側にあり蓮生ノ

そのむかしもまるぶもうく

○玉川　所謂六の玉川の一ノ海水なりくそ

塚の雲

哉壹

風雅集

ちとそもらみやこうくむ旅人のすゝぎもあへぬ玉川の水　雲ゐる堂寂本　弘法大師

十八景

寒玉幽溪傍二路邊一雲根繞出ッ夕陽前峯名不汲旅人手百

世尚傳一首一篇

玉川　秋園家集

檜はし
ゆきの
ふづくり
なかれ
そめん
玉川の
如

栂湖陰の碑　栗三世寺淵

姑射山の新しき　蕪村

玉川よりそれて行　来籾

○仏像地蔵　右は大師仏にて服を着給ふ尊像なり

○行基菩薩碑　右にあり　拾栗山人

○佛供杉　羽上を放物佛供と称す故と号く

惺窩文集　鳳峰絶頂一龕雲高閟霊蹤隔俗氛百圍老杉僧臘老五千見葉梵文紛貝葉　双檜流潔小魚楽三宝更蘭異鳥聞慈氏龍華開幾歳那伽大定約寄奴

○愛宕権現社　たゝあり

○數取地蔵尊　同上　俗伝人御朝参詣の輩小石を数と積しるし　此石像旧破ありしを功徳と積つゝ四斤となりしと地中より埋没ありを延宝年間大坂の塗師多ら

とらふ昔夢を蒙むる所在を知る穿出して是を合し尊像即ち寝ずとらふ

○塊亭碑　右あり碑陰に五橋亭風圭の銘あり

翁とゝなる香のそまつや九百坊　塊翁

○多田満仲公碑　同上　此側に南龍院殿勇そ即遺命あつて其碑を満仲とゝなつて建さめるよ且その碑の大さも分よ

○腰懸石　右にあり大師腰をこゝにさせられしとぞ

○蛇柳　同上　深沢の畔にあり大蛇あり〳〵妖をなす時に大師持咒〳〵ゐまします大蛇ゐよ柳生せり因〳〵此名ありとぞ一説に遠く是とやうに〳〵名づく〳〵て石蛇乃速逃去るが如し

夫木抄　正嘉二年毎日一首中

咲花よ錦掛りかゝる春山柳此糸をたてぬきにして

○譲摩石　右にあり大師の彼跡をとゞめられしを向て柳うゑ

○世南碑　背面に貫名氏乃銘文あり

民部卿知家

朱冠

世南

碑文

文政十二年巳丑三月九日江戸神田郷佐久間街失火西北風烈火所延焼東限墨水西暨外堤南至芝口其間第宅市廛挙為焦土男女燔死亡四千有餘人其他避火溺水或逃亡無縦者不可勝数也豈可不傷悼哀憫哉於是開法筵於當山追福作善以為燔死群霊往生仏利之資矣因勒小碑以標其事云

蛇柳

麦林

我門なる
柳
うえて
涼さよ

ともすれば
みかる袋て
ふりみだす
人の乱をよろむ
風の蛇柳

栗陰亭

○立合藤　右ハ行基大師と明神
○明智塀　同上世俗日向守光秀の墓と
○江戸火消屋敷塀　図の後ろ
○門脇宰相薗殿　同上
○護摩壇　同上大師修法を
○厳島明神祠　左ハ
○慈尊院明神祠　右ハ
○天野明神祠　上同
○中の橋　一の橋と称ス高野の橋ハ
ハ皆逆撫一の橋ハ同ト

極楽をもとめそろう橋ハ月

暉雄

○猫惣桜　豊臣秀吉
○汗地蔵　同上

あまり日でりの流汗地蔵のみまへふく

焦熱(こがる)ゝかなしる佛もうるほしの我友なれやまことにえ　易興

世をそゝく汗みそぐ乞ふ　車光

○藥井　同上清泉の井といふ　延喜帝の勅使お消玄平悩技ありて西疫ふうし
道中滅頭弥陀佛と唱ふく若人專念遍照尊一度參詣高野山無始罪障
忽隣ー且此井水を服せしに忽病ゐえ治せりとふ

○住吉祠　同上

○熱田祠　同

○八幡祠　同

○天照大神祠　同

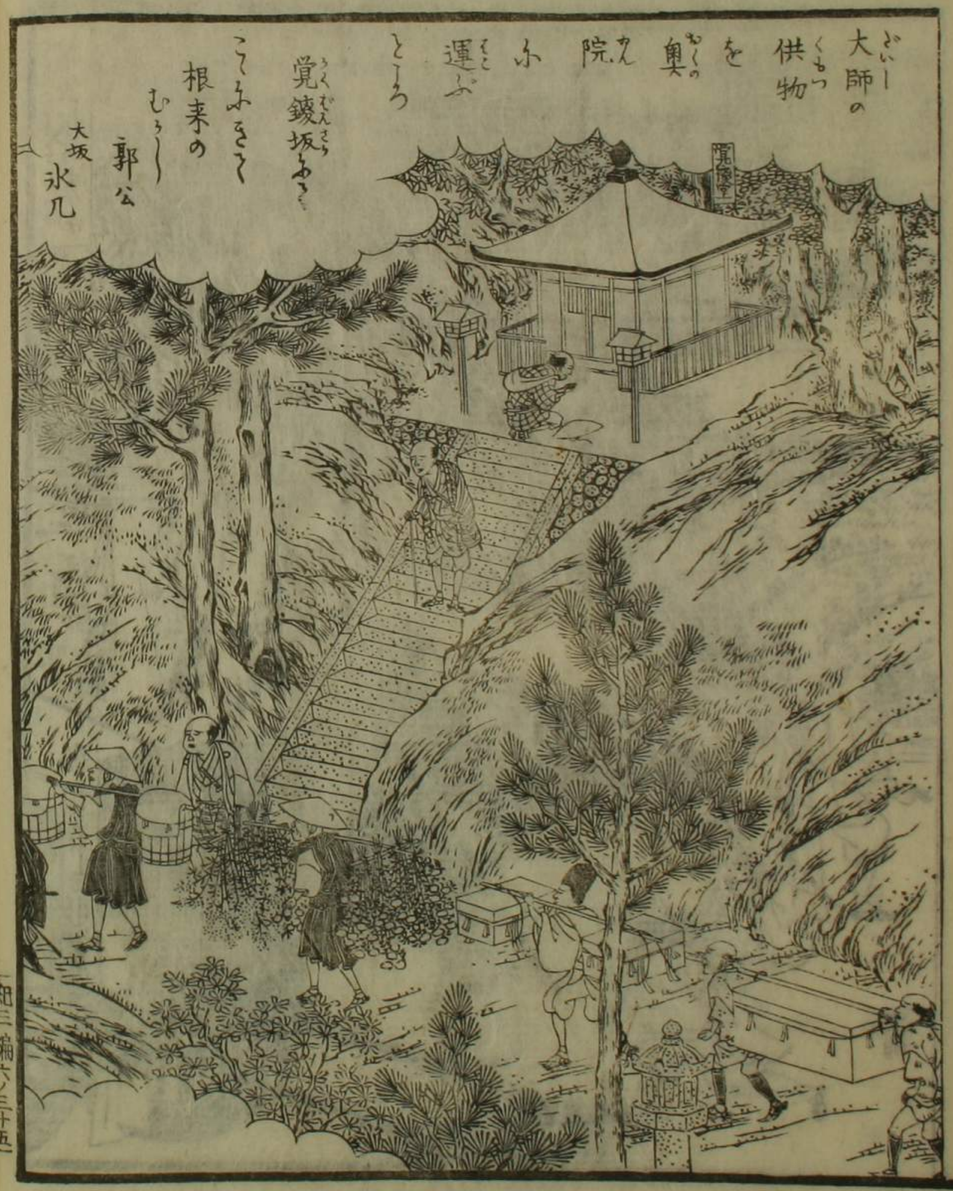
○春日大明神祠　同各勅使參向の時代詳ならず

○逢坂　俗に遠の坂ともいふ

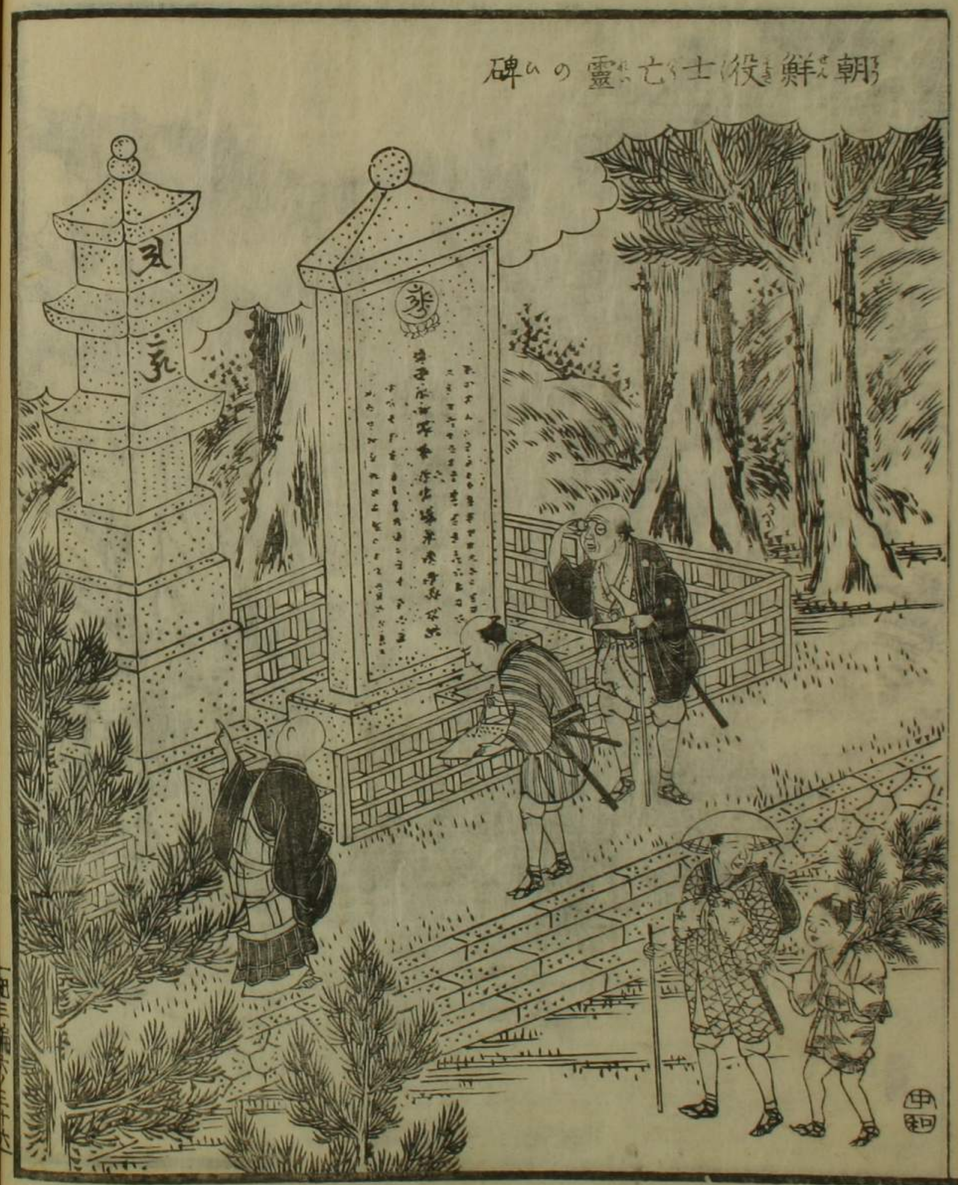
○吉野藏王權現祠　右二

○靱慶力石　同上祠考ふべし詳ならず

○覺鑁堂　同上扁額うへ密嚴堂とうつ保年中智山豊山の流使を再造ありとふ


ぐぃー
大師の
供物
を
奥の
院
ふ
運ぶ
ところ
覚鍐坂あさ
こふさま
根来の
郭公
大坂
氷几

朝鮮役士亡靈の碑



○頰截地藏尊 同上むく一人の多ふ代
○二番石塔 同上浅野侯の碑うつくしく
○笠刑地藏尊 同上一つ、笠刑地藏と云ふ
○朝鮮役士之碑 左こゝより長七尺餘
二寸餘厚さ七寸ばかり

慶長二年八月十五日於全羅道南原表大明國軍兵數千騎被討捕之內至當手前四百二十人伐果畢
同十月朔日於慶尚道泗川表大明人八万餘兵繫込畢

一為高麗國在陣之間敵味方関死軍兵皆令入佛道也

右於度々戰場味方士卒當弓箭刀伏被討者三千餘人海陸之間横死病死之輩具難記矣

薩州嶋津兵庫頭藤原朝臣義弘建之
忠恆
同子息

慶長三年嶋津氏之号曰新塞北築望津以扼晉江與新塞相距四十里又置永春昆陽等諸寨積穀東陽明董一元引軍抵晉州隔江而陣相持月餘明郭國安者降在望津與明將茅國器約為內應九月廿日國器勒兵渡江我兵臨岸防之寨中火起炎煙漲天衆驚而潰國器遂陷望津一元分兵攻永春昆陽縱火燕之我兵皆奔泗川泗川也築海畔徙據之以為根本

紀新塞之捷

中井積善

守將血戰突圍奔新寨一元又焚東陽倉火不熄者兩日夜自虜之攻望津新寨將士屢請赴援義弘不聽曰敵兵衆而氣銳難與爭不若固壘以逸待勞一元益進攻新寨將士皆奮欲邀戰義弘嚴令不許新寨一面臨海一面逼陸引海爲濠舸艦千數浪寨下一元素憚薩師疑其有詭退次泗川冬十月朔一元合兵二十萬復攻新寨自卯至巳其將彭信古用大熕擊寨門碎樓堞數處步兵逼濠拔柵爭登義弘隨機防禦殺傷過當鬨呼聲震地會虜熕發炸破火藥齊燃黑煙蔽空我兵乘勢啓門衝突嶋津忠恒鼓策先之信古兵三千殲焉餘衆披靡我兵尾而馳焉明朝遊軍茅國器葉邦榮率兵一萬擣虛傳城義弘逆料之圍之先遣明軍大敗績我師追亡逐北至津而返斬首三萬餘級

藤原千廣

石文の書ぶりは錦軍の碑の代わりに流鏑馬の頁を繰ると

やうな次第なり碑文語るところ多きも

為に之を略す

○天の川辯才天祠 碑

○熊野權現祠 以上

○開院宮御宝塔 碑

○一番石塔 以上

此五輪を崇源院殿の御石碑として駿河亞槻御毋公御追福の為ふ建させるよ所なり高さ三丈趺石二間四方よ亘る石の玉垣を繞らし山上億兆の碑碣ふ魁くるをりて俗ふ一番石塔ふ怪しき大石を此危峰の巔ふ登し事進ふ難ふ鷲ヶ峯らんなみ〳〵の石碑十ふ傾さ倒ふそそりたつをかく嶋ふ尊碑の地震暴風ふもゆるびうきふ尋常の制ふあらざるべし

○芭蕉墓 以上

父母の

雉子の

芭蕉翁

○石清水　同上　勅額の碑
　うつゝにもこゝのむかしの深きまことあるえんもくちつゝせゞ
　雪中菴翠太

○清水観音　左にあり

○雙輪塔　左にあり金泥を以て造る無垢浄光陀羅尼経の所依となり

○繼信忠信碑　各一基　左にあり

○法然上人碑　左にあり碑面の梵文並に源空の二字は上人自書にして奥の院登山のところに清浄心院谷の曼荼羅堂に蔵居し日毎に香水の念誦を修せらるゝ事と持ちたり

○盥漱盤　左にあり多くの石を以て造る

○俵藤太碑　同上

○聲明地蔵尊　同上にあり

○六孫王経基碑　同上　十八景
　古今相逐伴深禅碑碣縦横草苔連　雲石堂寂本
　風山月又雲烟　姓功名何所與山
　ひすびおくえふらやそのあるきを松の下多　放鵬子

○浅野内匠頭碑　同上　大石内蔵介の
　墓を結び四時あくまでふるぎし

○織田信長公碑　左にあり

○太閤秀吉公碑　同上　豊臣家の碑

○本阿彌七基石塔　同上　許多の辺ふあり
　火水地の漢字を鐫る空風

○木食所　同上　姑射山の
　雨露ふきあまる牧の葉なれ　一湖沼鵜居士の碑あり弘治元乙卯十月廿九日卒と
　まなくまた食の偈曲ハ大和国三輪里平等寺の住職長弘
　大徳當山なる乃至寂行ぞ一心院谷の蓮定院なるまことか

○姑射山　古來人間不通とて洛陽の未食所の傳ありひさごの花みゝ
　未食所とは洛陽の傳ありひさごの花みゝ

○御供所　太郎天別當眼拂持
　供所とは供物善美を盡せり大黒天辨才天を祀る宇賀神とも
　まゝ大師自彫の
　〳〵ゝ大黒天別當

山家集

おろかなるふるのやしろのかみ人もしつさをとりてやいのるらん

西行

○護摩堂　ちかう頼朝卿の息女曉
　僧都の創造とぞ

二衆の時の

○御室御庵室　同上道のまゝ
　あり今癈す

性信親王　仁
親王　竜

かざすようぐひすの蜀魂をきく紅葉をあめ雪とふるもの
後の世のつまとまでふかく人倫をよひ山ふかくすみそめて仏法僧の声のこるなまくさき
ろあもる雫雲のまゝ月ともふすまのせうじも今ハ名のみの院乃蘿洞の月ともふすまのせうじも今ハ名のみの院乃蘿洞の月ともふすまのせうじも今ハ名のみの院乃蘿洞の

続千載
ふる寺の谷もそことも三世代の日やてらん
日うら
そらにあるこゑの松もれ秋やきゆらん
続拾遺
いくかうき秋の夜ふけしぐれぶき
日うら
志ぐれうん都の空もふりひまそかなる
出観集
山端よかくしく月をみなせ世もひしきあさ

○静蓮法師庵室跡 地詳
続千載
誰もこれ家の名ぞくちの庵る 権大納言実国

○求聞持堂 日上 本尊虚空蔵菩薩 大治年中承掲上人の創する所なり 山僧修学増道の法を修を
一條天皇後上人
ことを創すと

○斯食所 日上古の燈籠堂の北の西の方にあり 全昔よりこの寺にて斯食を行ずともく穀味を断ちて佛経を看とよる七日
後有志のものの拈木再栄の祈
斯食のうち小金剛智
三蔵

○参籠所 日上上古の御室御庵室の逸りにあり 崇徳院御製
法並御膳所系湯ふ長日不退の行義あり供所の北常とゆく
覚性法親王
中務卿宗尊親王
入道二品親性助
覚性法親王

奥の院へ御参詣あるて大師の御室の窓をひらかせ給へば
風とふくそ瑜伽上乗の理をあらはす 山花雲と錦く赤肉中墨
の相を彩と前佛の化縁ともえまぬ時の説今再よあるかと
ぞ感涙をもよほせり遠寺の暮の鐘のよそおひ殿ふ遥なる
ぶし三月まで奥の院ふ通夜あて暁おせうある一首の小製あり

なのめなりしのやとさもしらぬ夜をそうき

○水手向所 同上 備前国秦氏の人盤水をもて参詣の法人は皆ここを用ゆ
先師大僧正堺進ぜられし安年中 織田二品卿出好進ぜられしとあり

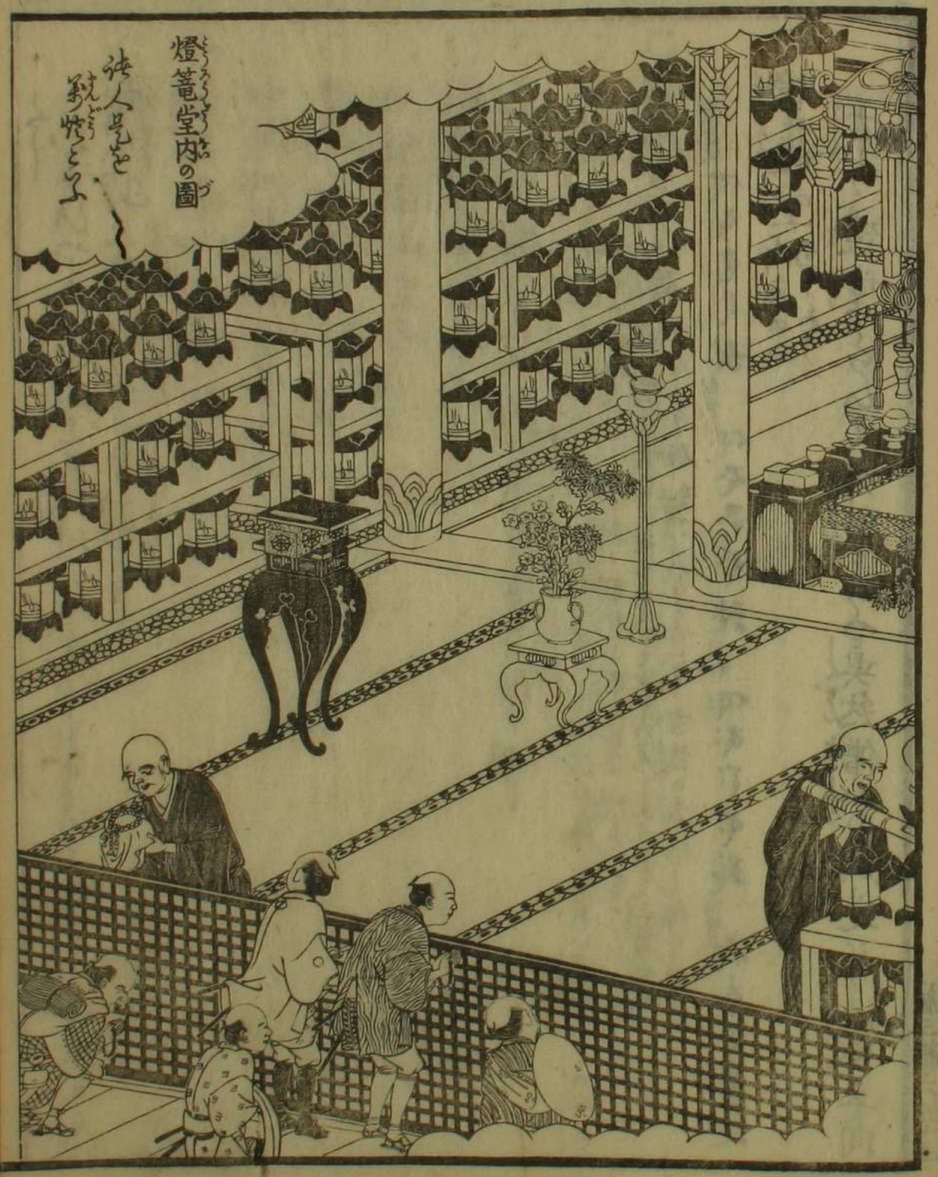
○明遍杉 日上 御庵の傍にあり 明遍上人東大寺より出家して
我国大師の御持ふりくしけ杖を此の傍ふさしおきて
と果しく萠芽を生じ枝葉繁茂して今ふ枯ず
続門葉
思ふ千やそちの松ぶ波をかけ 法眼覚親

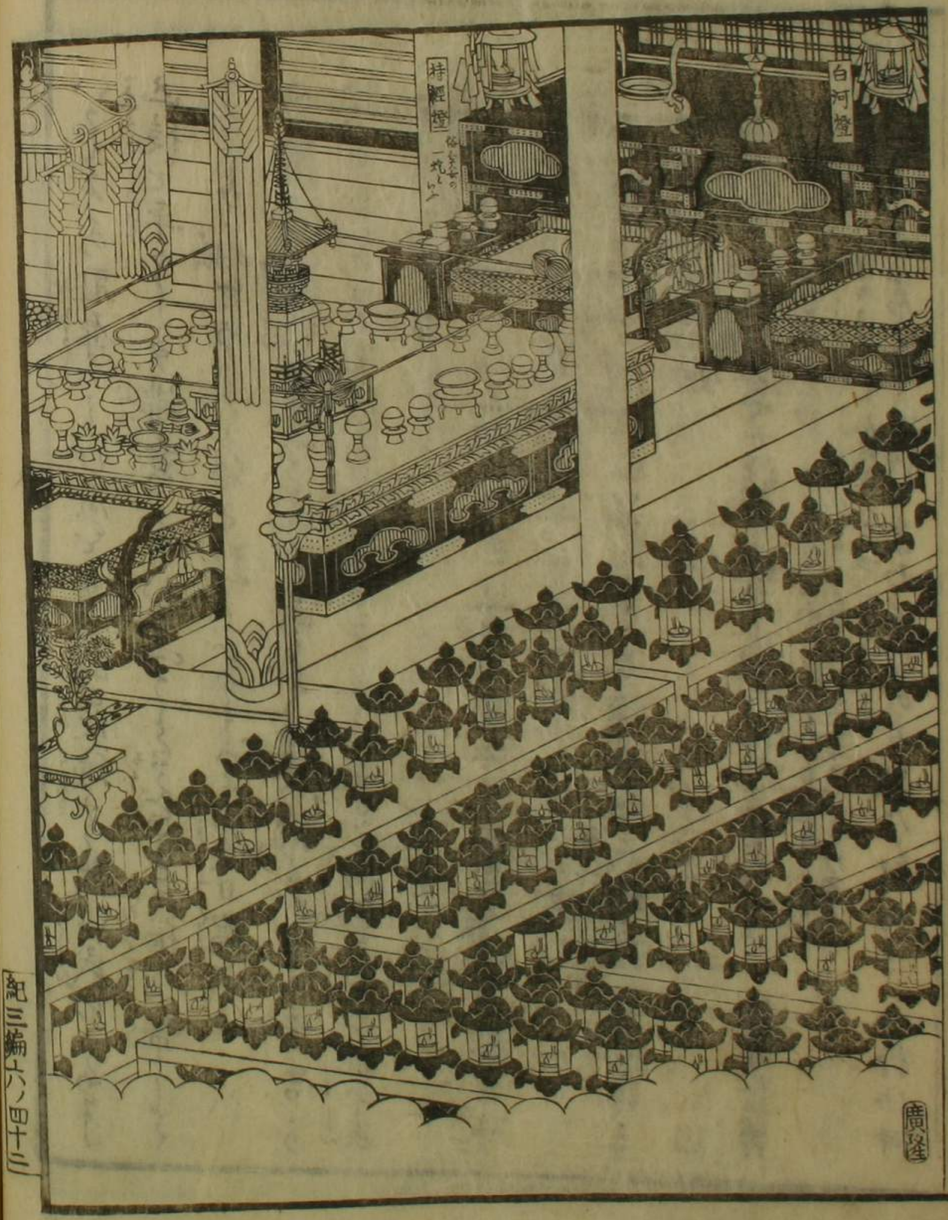
○ 坂の下より 光 廣

○御廟橋 俗称の西南に架す
此橋板三十七枚を蓋金剛峯會の三十七尊に表し裏面に
一々其種子を書す故に犯罪障碍ある人は是を渡る事を
えず 法性寺相國の再造にして延喜年中観
賢僧正大師を拝し帰朝ありし所なり大師この橋まで送りて
乃ち告ていはく我今汝が本有の佛性をさとる只汝のごふ
都べて参詣の道俗有縁の輩を送るべし又昔時豊臣秀吉公空山
猶遠くも極楽浄土へ送るぞと夜應其上人に御供してこの橋を渡
りしに忽ち大師あまたもろともに御廟へ帰りたまふと上人
申されしは太閤のごとき小やう罪障ふかき者の此橋を渡
給ずして我今天下を掌握するぞといふ数多の人を害を明日列侯を
おひて詰ごむとき此橋にて悔謝ありし事

いくそくの耻辱なくひたすら此夜哉、我万民のこゝろ
巡礼を平ぐくる佛意ことわりそ
てそそゝぬせめくくさかひ日橋をもひ
小田供乃御使をかくんぐ猶来帯くく
罷なゝをもいれゝ
幸なるかな
御廟橋着一片扨拽云々 昔者豊公之築驚猶畏縮移時
熊野名所南紀行
今白面書生舞踏過之世態之変人情可見
十八景 廟前橋
岩水閣来一澗流扨橋相架境清幽行人踟躇過猶顧上
雲石堂宋林
下烟霞古木稠
夫木抄 御集
いとゝやこのまふる苔の橋もとに
法性寺之道圀
山家集
こゝろなくまつひきやりふなばしり
うき世の夢はれくのこゝろ
うき世の夢はれくのこゝろ
西行法師

燈籠堂内の圖





○ひやるんろくそ掲れ示寺へる月のうばゝ　西住上人
○彌勒石　本側あり秘説あり小堂の内おく
○霊元帝御宝塔　たまふ
○中御門帝御宝塔　同上
○櫻町帝御宝塔　同上
○桃園帝御宝塔　同上
○閑院宮御宝塔　同上
○筆地蔵尊　同上又ハ麻地蔵
○盲大師　御像　渡せり今ふるそ朝〳〵眼中ふ照と祈ハ愈と
○親鸞上人碑　碑前　碑背　碑陰

○燈籠堂　御廟ふ面

古ろ禮堂ろひ又拝殿ろ眞然僧正の創造なり治安年間

禪定殿下道長公再造〳〵後　鳥羽帝御〳〵常燈を献じたまひ〳〵より燈籠堂の名起まろそろ〳〵怜明の功徳莫大なり大師御在世のとき深重の御願ろろ〳〵万燈會を設さ一燈を挑ぐろ野明神ふ和歌を奉〳〵

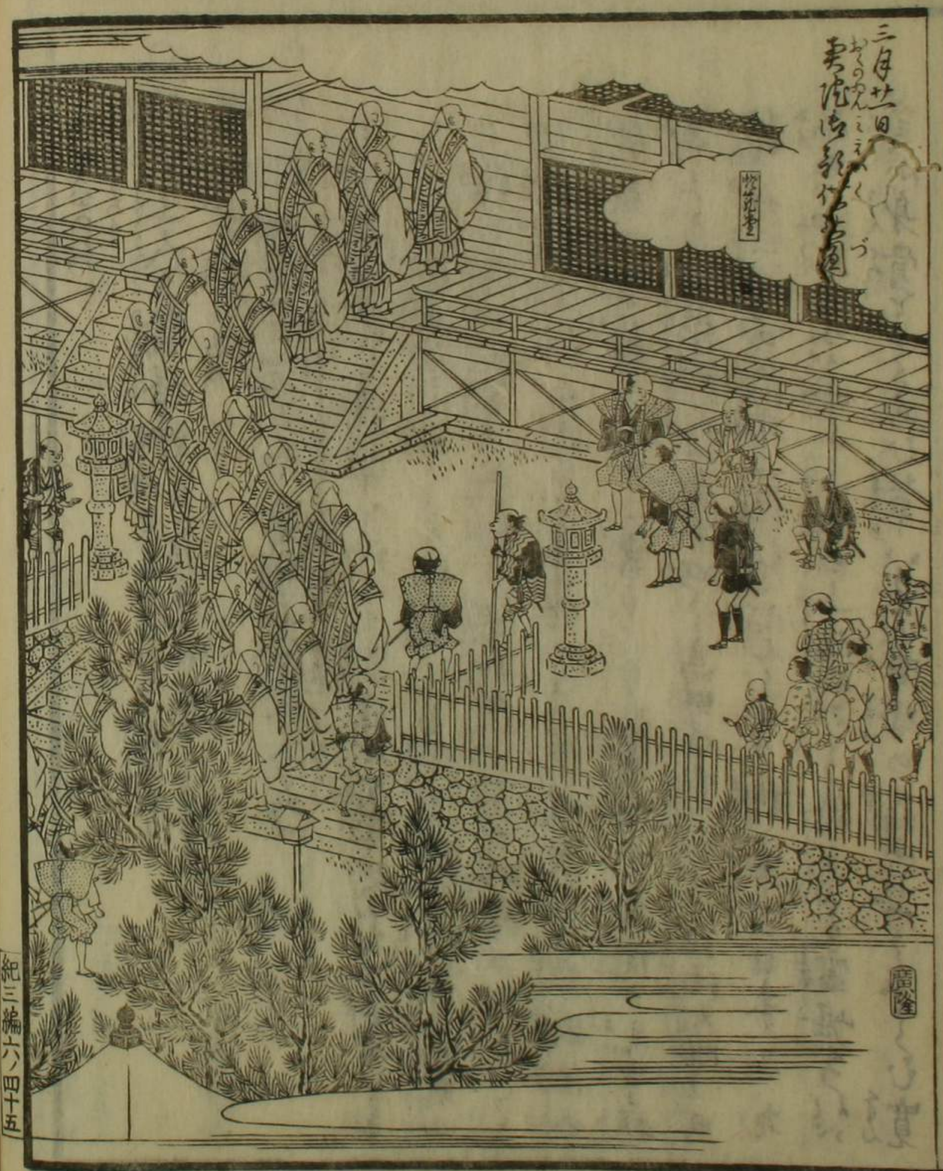
我こゝろよときえそせ文世よ著〳〵御入定のち祈親上人燧を鑽そ更ゝかの上人修造の功ろ因〳〵光明帝常照和尚の謚号を給今中央ふ一大燈を挑ぐろ持経燈と以持経ろ彼上人の号ふまで是をり〳〵遺列を燻ろ千ろむ御ふ古い萬燈會を手ふてなろ〳〵ふ鼻祖の御徳を慕ろせろひ〳〵　白河法皇御幸臨のときい萬燈を献ぐろ中ふを御手自ら挑げ東の方持経燈ろ對すろ一大燈是なり白河燈と以又

神君更ニ御力ヲ添ヘ給ヒ永ク此會ノ斷絶ヲ禁ジ
法式ヲ守ラセ給ヒシヨリ海内ノ信男信女日夜ニ璎珞ヲ拋
ツ終ニ永世不退轉ノ萬燈會トナリケリ
續千載 弘安元年百首奉ラセケルニ
サヽゝゐのくれ堂燈明ヲ數ナクアゲテモ
雪玉集 御前ノ丸堂燈明ヲ
ありつゝそゝるふしつゝ 數ナクアゲテモ
夫木抄 六帖題 法師 大師ノ御徳ヲ
ゝ歎ニあかむ光をまつ人の 仰ギ奉ル
新葉集 釈教 ゝゐ山 ゐのくまの
ゝゐ山あつさをくまの 曉更燈
松下集 なりの山ふもとうすみふゝ
ゝゐの堂ひ〳〵をこゝやのれ灯史 正廣
萬燈堂賦和詩一絶
臘ニ氣の富よりも清貧で潔さ千載の今も猶一燈の影高〳〵
其柏亭惜友
くも五月のやゝもふ〳〵 塊亭凡悟

○持經上人碑 燈籠堂の
○御所芝 瑞籬の東の方ニあり 天子臨幸の時ニ設ケ御座ヲ拜シ給フ 堀河院納髮の碑 白川法皇の經碑 岡白

碑半あり

○應其上人五輪塔 瑞籬のそば西の方にあり銘文長〳〵
○覺智碑 同上東の方よりあり
○骨堂 即廟の右檀下にあり八角造の堂なり今ある所へ
元和七年中松下河内守元綱朝臣の造立なり
天下の緇素ヲ遺骨ヲ所ニ置ント云ヒ堂ヲ
もうすむ事ゝし古くより例ふ〳〵即大師の御記ニ我山
小贈ル所の人者ハ舍利ヲ我毎日三密の加持力ヲ以ヲ
先安養宝刹ニ送ヲ當來ニかならず我山ニ慈尊說法の
聽衆の菩薩ニなるべしと書ゝまし東福寺虎関ガ元亨釋
書ニ國俗亡人の骨ヲ高野ニ空ムル弘法大師の
龍花三會の大定ニ伴ハンガ爲ナリ抑當山ハ日本ニ九
品の淨土あるが中ニ上品の上生ニ往ント願ヒ
身骨ヲ葬ムヘキ華ハ有緣の益アルガ爲ナリ寛



治中ヶ東寺の公頭僧正勝賀とくいしゝが讃歎善通寺の
別當ふかゝく下向あるゝ時彼寺ふ於ゝ御筆の一紙を感
得せゝ文ふ

トニ居ヲ於高野樹下ニ　遊ニ神ヲ於兜率雲上ニ
不ル關ニ日々之影響ヲ　撿ニ知ス處々之遺跡ヲ

かくそえゝふ於高祖草創の名刹を望む人の巨益空ゝかゝるが
中ゝを眼のいゝ入定留身の地の尊さを知ゝゝさんべ世挙ゝ
亡者の爲ふ帰依の院々へ日牌月牌をゝゝ長くゝ法号を此
山内ゝ留め五十六億下生の暁まゝゝ晨夕の回向ふいつゝ功徳
莫大なるべゝ

勅後撰　　貞空上人

君も又契ありやるる山ゝをともふ行ゝ幕

雪玉集

飛のくれおうまれの死を更ゝ仏のこゝろふふれつゝ　實隆公

この内ゝふゞふ事郷波安ゝそゝ色行ゝそゝ
そゝぞいまゝゝそゝを行ゝ人ゝの紙ゞノ

同

くゞ玉のを忌緊れひとすぢふゆみづを行ゝ流ゝそよ　同

像あゝゝゝ這ゝ色ゝ二ゝ紀者の
ゝゝふあゝゝ後多ゝ者ゝてのゝ

同

いそゞろはをそゝむくひとすぢふゆみづを行ゝ流ゝそよ　同

雲光院殿ゝ飛ゝ山ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
このゝゝへゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

同

よゝあれよゞれを急ゝはの行ゝ流ゝそよ　同

宝町殿物語

ゝゝ山おゝを嵐のそゞげゝゝそのゝゝのよゝ後の世すでも　同

ゝゝゝゝゝゝゝゝ
改ゝゝ紙ゝ名ゝゝ
ゝゝとゝゝ

慳齋文集

葛の葉のうらみ恨つゝまでやうき世の中ふ秋ふ逢ふ

栗園家集

そゝそえたぐひあゝものゝ閼伽井ゝ水ゝもの　白玉

○看經新百上

○一切經藏 北方あり

○丹生高野両大明神 御廟の傍にあり天暦七年

○霊烏 往昔より御廟の辺に一双の烏ありて天烏と云今は御供所より日々野山に入道範阿闍梨祕記に云

鳥は人道の輿院の烏は天照大神の使令し

○佛法僧鳥 一名三宝鳥とも云当山及び紀光比叡松の尾鳳来寺などの深山にをる雄は形鳩のごとく小さく尾の端黒色背胆く脚とも赤色なり鳴声ブッポウソウと聞ゆ契沖阿闍梨のごとく佛法僧鳥のなくやうは紀とさやふうことゝ云ふ尼峯上其声似呼佛法僧とあるごとし唯一雄と一雌と形ちて人里に来り沙場に穴を掘て雛を育す黒点ある嘴淡紅色脚淡黄色都てそも鳴ことまれなり近書逸久なくうかゝことき者がかやうの宝れをもつ

弁内侍日記 詳なる桃洞遺筆に辨あり古書まと見えず

御集

わづかにもほとゝぎすかなくさとをみ
待こゝろもや御ほとを行ひのまつらるゆふあけの月 豊日太閤

後鳥羽院御製

紀三編 六の四十七

寂寥として竹の庵ふるもんやそのの月　芳樹麻呂

○萬年草　和歌の四手などに苔のやうにして根葉ともに細葉多く殊生す擣て汁を漉せば色紫なり又名玉掃一名玉遂ともいふ俗ふさ〳〵とよりて人をしのぶ草ともいふ又日光山のものは葉竹に似て葉竹ハ一名玉竹とひらく形状もまた若枝などのごとし

終南師遺稿
率陁宮殿侍山巓削出芙蓉八葉蓮脈起青龍衍東域秘
開鐵塔見南天珍禽曉唱呼三宝萬草長栄保萬年登陟
高起法雲外此身疑是證金仙

○三山　此山を鼎峯とも鼎足ともいふ深意あるとこうや

轉軸山　摩尼山

十八景
楊轉摩尼三笥山峻嶋相對挿天間朝々暮々欲為雨一
昂蒸楊雲往還

雲石堂宗本

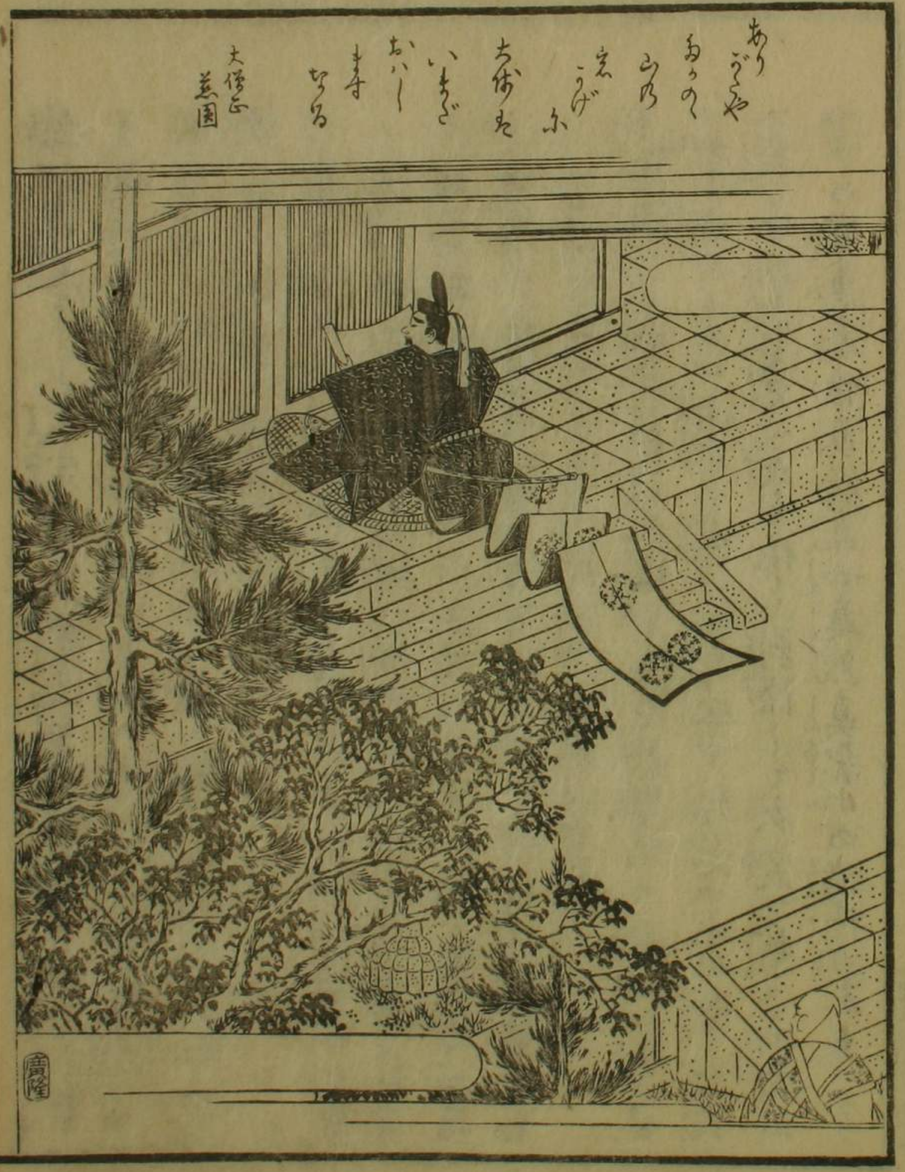
寂寥と苔の庵の実のもるもるまに　塊亭

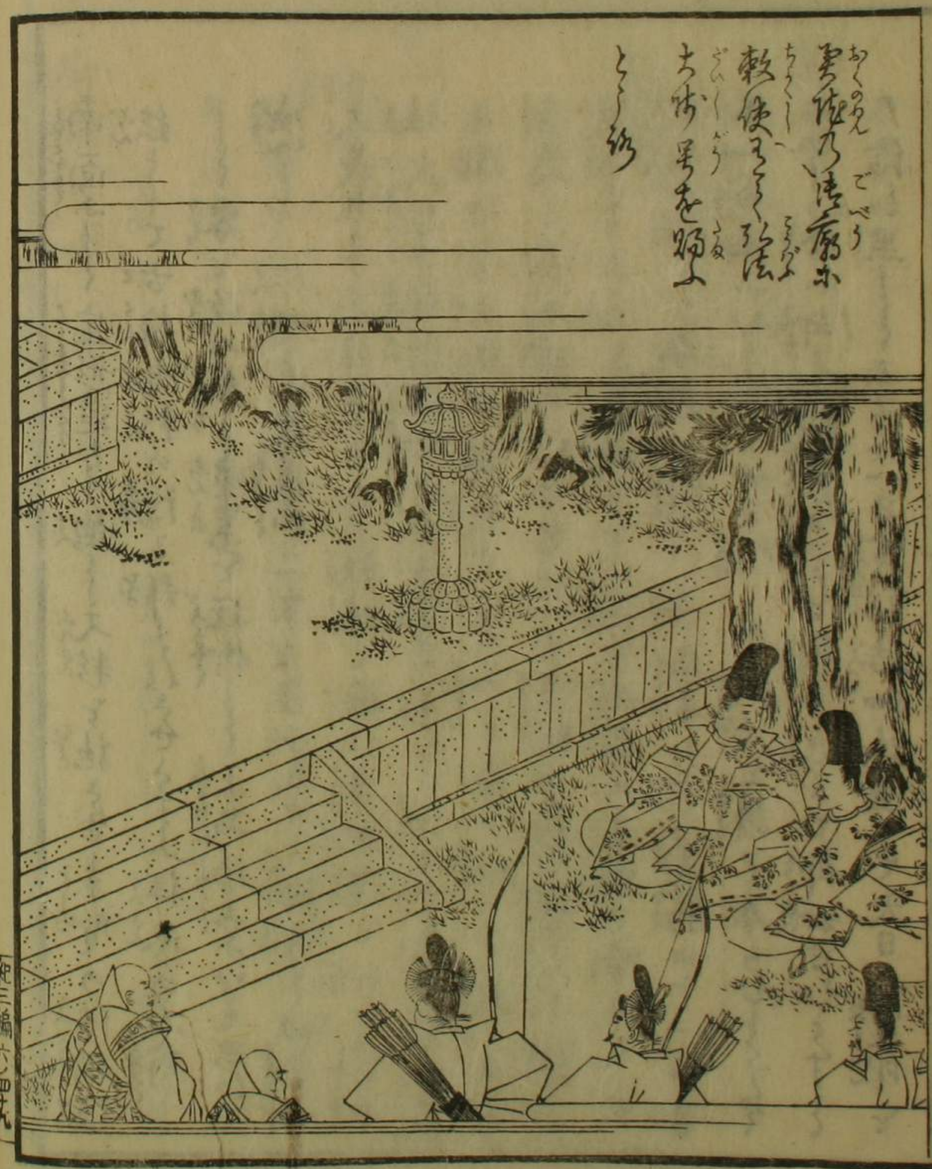
○御廟　一ふ禅定の洞とも歌にも岩の室

南面ふ〳〵宝形造なり總〳〵文彩を施さず素質の結構隠
然として古檜老杉の陰に拝まるゝ拝参の人粛〳〵と
〳〵容を改め忽ち赤塵累を絶俗〳〵上品浄土ふるまひを
成〳〵

仁明天皇兼和二年三月十五日大師告〳〵曰吾去
天長九年十二月十二日より穀味を厭ひ専座禅を好む皆令
法久住の勝計ませ世の弟子等の為なり方今諸の弟子諦
よ聞け吾生期今幾程ならず汝等能く住〳〵教法を
もち〳〵吾入滅の〳〵今月廿一日寅刻なるべし〳〵諸弟子歎〳〵
悲泣する事勿れ吾滅し後信を両部の三宝に帰せよ自
然我が伐〳〵眷顧を蒙むる吾生年六十二夏臈四十一也吾
本一百歳ふるまでも世に住〳〵教法を護て奉らむとす〳〵
こひしう今の却〳〵緒弟子等を頼〳〵急ぎて即世せむとす
乃ち給ひ果〳〵三月廿一日寅刻結跏趺坐して大日の定印を

ありぐや
あるの
ふ
ふ
ふ
ふ
ふ
ふ





結び奄然として入定しぬ。兼日一旬の間四時の御行法あり。同廿五日仁明帝勅使を以て吊書を賜ふ。其文に曰く

真言洪匝密教宗師邦家憑其讃持動擯荷其攝念豈圖嵓嵓未迫無常遽侵仁舟覆掉弱喪失恃嗚呼哀哉禪關僻左音問晩傳不能使者奔赴相助荼毘言之為恨悵恨曷已思忖舊當悲涼可料今者遥寄單言吊之著録弟子入室桑門悽愴奈何兼以達旨

餘親王公卿貴賤道俗離別の悲歎嬰兒の悲母を失つるが如く漸七々日の御忌ふ迫ぴ尊容を拝見する顔色衰へ給ふ。髪髮更ふ長ぜ依々剃除して衣裳を整へ宝輿よをもて寶恵真雅真濟真如真然真紹よの諸徳共ふ扶り駕して奥院ふ移し奉る。供奉の御弟子一萬餘人その外結縁の道俗數を知ず。摩尼峯の下姑射山ふ對して石室を設けて定身を安置し奉る。上ふ五輪の塔婆を置き佛舎利を安じ又宝塔を建く種々の梵本陀羅尼を納め皆もて真然大徳の営なり。

文徳天皇天安元年贈大僧正

清和天皇貞觀六年法印大和尚位を贈る。

醍醐天皇の御宇寛平法皇及ひ僧正観賢の奏聞ふ弘法大師の諡号を賜ふ。既にして延喜廿年十月廿日の夜の御夢ふ告ぐ曰

帝大ふ感歎ましまして即ち緋色の法衣を賜ふ。廟使の石山の観賢・教使ふ少納言平惟助を以て告ぐ。共ふ同廿七日ふ日令賛和書於火納言惟助發詔曰琴絃已絶遺音更清蘭遺千紀伊國金剛峯寺ニ云々

纂雖周。餘芳猶播。故贈大僧正法印大和尚位空海。消疲煩惱。抛弃驕貪。全三十七品之修行。九十六種之邪見。既而佛日西没。渡溟海而仰餘輝。法水東流。通陵谷而導清浪。受密語者多。満山林習眞趣者自成澍叢。況乎太上法皇。既味其道。追憶其人。誠雖浮天之洪濤。何忘積石之源。未遑加崇餗之典。謚弘法大師。勅使詔書を讀竟きぬ。廟中に聲〻我昔遇灌頂親悉傳印明。發無比誓願。陪邊地異域。肉身證三昧。待慈氏下生。晝夜愍萬民。任普賢悲情。と唱へさせ給へば。僧正勅賜の御衣と捧げ〻廟内より入て尊容を拜〻奉るに。顔色変ぜず。儼然と〻生時のやう。頭髮を剃除し衣裳を寢かし奉て永く祕封を奥ふ石山の内供淨衫いまだ従い石室に入〻ても尊容を拜する事とえ。僧正は右の手を取〻御膝を撫〻めぐまふ

其手生涯異香消せずとぞ

御廟は　村上天皇の御宇

所なり　相傳ふ嘉吉年間一休和尚登山のとき奥院に弘法を虚空の定かもいやまそに虚空も空もうきことのそもそもかくもかくもしかのみ和尚哉佛〻〻と泳せまいらせ給ひしかば廟中より色あり〻と口碑に傳ふ昔内供所持の聖教の手の香今の移香と潮世に故り匂いの聖僧とたゝへ

紀伊國名處圖繪三編六之卷終

天保六年十月官輸上淮

天保九年九月海宇發行

京師 法橋中和
画工 同 小野廣隆
浪華 上田公長

京師 池田東籬亭
筆耕 浪華 鄧闕牛

天保九年戌九月

江戸 須原屋茂兵衛
浪華 河内屋太助
和歌山 帯屋伊兵衛

製本書林

雕刻姓名
七之巻 平安 井上治兵衛
浪華 市田治郎兵衛
八之巻 〃
九之巻 平安 井上治兵衛
十之巻 〃
十一之巻 〃
十二之巻 〃

和三編六ノ五十三